

---

# 東方槐無夢

ジラート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方槐無夢

### 【Nコード】

N2043Y

### 【作者名】

ジラート

### 【あらすじ】

東方の永琳と夫婦喧嘩したかったからはじめた。

なお出るキャラ全て好意的に見られるのは個人的に非常にむず痒い為、性格不一致による嫌悪・敵対関係などもありハーレムな展開はない・・・と思う。

またそれなりに独自解釈がありますよつと。

まあそんなこんなで暇な方はどうぞ

1話　そして彼女は来た（前書き）

えーりん！かわいいよ！えーりん！

## 1話　そして彼女は来た

雪が降りそそぐ昼下がりに、俺は同じ職場の先輩に話を持ちかけた。

「ほう、最近寒気が感じると?」

「ええ、いや風邪とか熱とかはないんですよ」

冬は本番であるが、むしろ秋から冬にかけての期間が一番風邪を引きやすい。

というか冬本番になれば馬鹿をしない限り風邪など引くまい。

3

先輩は言葉を先回りされたのか小さく「ふむう」と呟いた。  
普段から鋭い瞳をさらに引き絞り右手の人差し指で軽く唇を撫でて  
いる。

先輩独特の癖で何かを考えるとよくこのモーションをとるのだが、  
傍からみるとかなり怖い。

傍から見るとガンつけているようにも見えなくもない。

視線が異様に鋭い以外は完璧なのだ、顔のパーツもいいし、性格も  
堅実で気配りできるタイプ。

が、その瞳の鋭さが災いして先輩が何か話すたび、皆背筋を伸ばし  
直立スタイルをとるのである。

……主任ですらそうなのだからもはや救いようがない。

そういう俺も最初はその目線にビビッて同時入社した同僚の中で一  
番腰が引けてたが、今では一番仲がいいのもその先輩である。

世の中わからんもんだ。

そんな先輩は俺の質問を程よく咀嚼したのかこちら目を向けた・・・  
・ ・ ・ つもりなんだろうな、睨んでる様にしか見えないが。

「もしかして、アレか？」

ぬ、鋭い。

もうちょっと話が二転三転するかと思ったが、いきなり確信をついてきた。

さすが先輩、無駄にハイスペック。

軽く目を見開いている俺に先輩はすつと目を細めた・・・こえーよそんな俺には目もくれず先輩は口を開いた。

「幽霊でもでたか？」

そうである。そうなのである。

真に遺憾ではあるがこの俺には多少ではあるが靈感というのが存在する。

別に欲しくもなかったが、母親の叔母にあたる人が昔霊媒師をしていたそうなの、胡散臭せえ。

そしてそれに血の流れを汲んで俺にもそういう才覚に目覚めたといいたいのだが、異能は女に強く受け継がれる性質を持つという。

まあ端的に言おう、要するに単純に勘が鋭い程度である。

幽霊もほぼ見えない、たまに視線の端に居るはずのない人影が歩い

てたり、視線を向けられて背筋が凍ったりその程度である。  
むしろ妹のほうが血をよく受け継いでいる。  
二人で買い物に行った際、突然悲鳴を上げながら走り出す妹を俺は  
呆然と見ている事しかできなかった。

そんな事情をしる先輩がその結論に至ったのは別に不思議でもなん  
でもない、先輩からしてみれば当然なのだろう。  
とはいえ、

「うあ、正解です。いきなり確信突きますかね」

「お前の悩み事なんてそれくらいしかないと思ってたけどな」

うるせいほっとけ！

心の中で軽く突っ込みを入れ、仕事用の書類まとめる。  
今日中にこれを済まさないと帰れない。

「俺にだって色々悩み事くらいありますよ」

「で、いつごろそんなことがあったんだ？」

「5日前くらいの事ですが・・・」

その日俺は目覚ましよりも先に目が覚めた。

(なんだ?)

最初に疑問を持ったのは不思議と冴えた頭と、氷水につかった直後のような寒気。

俺はこの感覚は知っている、幽霊が寝込みを襲ってきたのだから忘れるという作業の方が難しい。

心臓は速く、体は熱く、意識は冷たく  
瞳孔が開いた

初めて俺ははつきりとした形で幽霊を見た、視界の端に銀髪の女性が探るような瞳でこちらを見つめていた。

ここまで語ったのだが先輩の反応は相変わらずクレバーだった。

「ふーん、けど前に比べたらましたな」

そついう問題でもない気がするが、俺は話を合わせておく。

「前は完璧に寝込み襲われましたからね」

「で?」

そこで先輩は話を切ってこちらに鋭い視線を投げつけた。

「それくらいじゃないよな？お前はさつき『最近』といったし、そもこの程度じゃ俺に相談すらもちこまないだろ？」

ええい、本当に鋭い。

先輩にとって目の鋭さと物事の本質を見切る鋭さは同類項なのだろうか。

「そのとおりです。それからちよくちよく寒気がして・・・特に朝とかですねぇ・・・」

朝夜の境界線。

幽霊とは精神体である。

そして精神体である以上、俺たちに物理的に干渉することは出来ず、精神での干渉が精一杯なのだ。

さらに言つとその精神干渉自体も、人が精神的にも肉体的にも健全であれば侵入することすらままならない。

せいぜい相手の精神と意識の狭間でしか干渉出来ず、仮に人が意識してみようとすると霊体自体の精神が人の精神に弾かれ見えなくなる。

ならば人が寝てたら無防備では？

と思うだろうが人は寝ると意識と精神が完全に自分という殻に閉じ

こもり、情報の最適化を行うのである。  
その間ほぼ全ての感覚シャットアウトするため、霊体に付け入る隙を与えない。

「しかし・・・朝夜の境界線。覚醒と休眠の狭間、この瞬間こそ霊体が人に干渉する唯一の時間」

それ故に俺はこんなにも苦しまなければいけない。  
こんなに苦しいのなら、こんなに辛いのなら・・・

「霊力などいらぬ！」

そんな全身全霊をこめた俺の嘆きを先輩は面倒くさそうに眺めながらポツリと呟いた。

「で？どうすんだ？」

ゆがみねえ

「とりあえずお札とか張ってみますよ、うちの曾婆ちゃんがアレだったんでそれなりにコネ持ってるんで」

「そうかい、じゃあ一件落着だな」

「しかし嫌な予感しかしないです」

「勘か？」

「勘です」

「そうかじゃあ当たるな」

うぼあー

デスクに突っ伏す俺を片目で捕らえつつ、先輩は自分の仕事に戻っていった。

目が覚める。

俺は布団を顔まで被りながら再びきつく目を閉じた。

視ている。

誰かが。

布団越しに視線を感じる。

何か居る・・・

俺は札の効力の無力っぷりに歯噛みしつつ、口の中でもごもごこと原稿用紙一枚分の文句を呟いて、絶望した。

(こ、怖い・・・)

得体の知れない何か俺を覗き込んでいるっただけでもうたまらな  
い、勘弁してくれ。

人なら何とかなる、物理攻撃に物を言わせれば済む話だ。

(けど、霊体ってどうしたらいいの?)

俺は霊媒師でもなければ悟りを開いた僧でもない。

一応覚醒状態になれば干渉は早々受けないとわかっていても怖いも  
のは怖い。

(布団からがばりと跳ね起きたら至近距離に怨み積もった女の顔・  
・無理だ！怖すぎる！現状維持！)

そういつて再び目蓋に力を入れるも状況はまったく好転しない。

当然である、行動しなければ進展も後退もない。

(し、ししかたない、もうやけだ！1・2・3で飛び起きる、やるぞお！)

1

2

・・・3！

布団を力の限り跳ね飛ばし、視線があつた方向に目を移す。  
一気に肺に空気を送り込み、一息に気力を練りこみ、一声により全  
てを吹き飛ばそうとした・・・・・・・・・・はずだった

「う・・・・・・・・あ？」

そこには白銀の髪と赤と青を基調とした服を着た女性がたっていた。

彼女の姿を見た瞬間言葉を失った。

吸い込まれるように彼女の瞳を、顔を、全体を見て取った。

心臓が高鳴った、狂おしいほどの情熱で

頭が萎縮した、彼女以外の全てがどうでもよくなって

そして、俺は彼女の声聞いた。

(いた)

そういつて彼女は姿を消した。

何を？  
何が？  
何で？

あらゆる疑問符が頭の中を渦巻いたが、それを思う自分の気持ちはひどく客観的だった。  
それほどまでに俺は彼女に心のあらゆるものを奪われた。

俺は何を考えるもなくベッドに突っ伏した。  
ただただ体が休息を求めている。

勘は当たったのだろうか。それとも外れたのだろうか。  
よくわからないまま俺の目蓋はそのまま落ち、同じく意識も落ちた。

「す、すいませんでした！」

そして俺はものの見事に遅刻した。我ながらあほ過ぎる。直立角度45度の形で頭を下げてる俺に先輩は方眉を上げた。二人の間に微妙な沈黙が流れる。最初に口を開いたのは先輩だった。

「昨日言ってたアレのせいかな？」

どうやら先輩は昨日のことはよく覚えていてくれたらしい。ほんと細かいところまで気配りができる人だ。おそらくここで俺が『アレのせい』と一言でいってしまったえば先輩は事情を察して何かしら主任に一言言ってくれるだろう。理解の深い先輩を俺は心底尊敬している。しかし、だからこそここで甘えるのは俺が許せん。

「いえ、例えそうであっても俺が遅刻した事理由にはなりません」

先輩の瞳が鋭くなり、俺に不気味な威圧感与えてくる。それでも俺は視線をそらすことなく見続ける。いや、今なら全てのものを恐れず見つめれるに違いない。昨日の出来事は俺の何かを変えたのだった。

「そうか、じゃあ主任に謝ってこい」

そういつて先輩は自分の仕事に戻っていった、口元に苦笑のような笑みを貼り付けながら。

そうして俺は出会った。

彼女に一世一代の恋を託した。

そして、彼女は来た

## 1話 そして彼女は来た（後書き）

どうも皆様、二次創作は初めてです。

それ以上に怖いです。『特定しました^^』って書かれたら・・・  
オリならともかく二次は特定されたら死ぬ以外の選択肢が見当たらない

2話 なんじゃそりゃ？(前書き)

えーりんもつと出したい  
早く幻想入りたいなあ

## 2話 なんじゃそりゃ？

仕事の中俺はずっと彼女のことを考えていた。

枕元にたっていた幽霊に恋している。

白銀の髪に透き通った黒瑪瑙のような瞳、体からあふれる気はとも幽霊の様には見えず、生气に包まれているようだった。

(もしかや彼女は生霊ではないだろうか？)

落ち着いた今でこそそう思うがこればかりは本職でもない俺にはわからない。

しかしあそこまではつきりと幽霊を見たのは初めてだ。いつもは半透明な人影で、性別と年齢くらいしかわからなかったからな。

軽く背伸びをして腰を伸ばす。デスクワークは肩と腰に来る、後尻痛い。

(つまり彼女は覚醒中である人間の精神力に、進行出来るくらいの精神生命体であるということか)

ぼんやり考える、いかに生霊でも覚醒状態の人には干渉なんて出来ない。

そもそも生きた人間に干渉できるモノ、例えば有名な心霊スポットなんかは多くの精神エネルギーの集合体である。

その不特定多数の精神体が冷やかにやってきた少数の馬鹿どもをいっせいに攻撃することにより、即効性の干渉が可能になる。

逆にこれが数多の馬鹿どもになると精神体も手がつけられない。地

力から違うのだから数を揃われたらせいぜい意識の隙間をぬって嫌がらせのゲリラ戦法しか通用しない。

しかし彼女は単体で米粒ほどの霊力しか持たない俺に対してとはいえ、干渉を行うことが出来た。

となると彼女に強い思念があるか、彼女自身にすさまじい霊力が宿っており、他者に介入することが出来るか。

(ってどんな呪術師だよ、前時代過ぎる)

そんな霊力とか精神力とか意味不明な謎エネルギーを頼るくらいならもっと他にすることあるだろう。

コップを謎エネルギーで動かすのに50年修行して体現できたとしても、物理学的に鑑みると指先ひとつで体現できる。

阿呆臭い。幽霊なんてものに逐一気を配る労力を費やすのなら、人間関係に費やしたほうがよっぽど健全的である。

結局出た結論は、生きた人間のほうがよっぽど厄介だ、ということだろう。

アレは白昼夢と認定してさっさと忘れた方が得なのさ。

そう言い聞かせて体から競り上がる憧憬の炎を無理やり鎮火させる。ちくせう、わかっている。俺はそんな幽霊に一目ぼれしてしまった。

頭を抱える。

俺、もしかして生気吸われてる？

そのとき俯いてウンウン唸っている俺の首元に衝撃が走った。

痛い！と思う前に俺の意識が電源コードを抜いたテレビのようにぶ

つりと途切れる。

「起きろ、食事の時間だ」

先輩そういつて彼にグラップラーばりの手刀を一撃見舞わせ一人肩で風を切りながら食堂へ向かっていった。

もっとも意識が完全にブラックアウトしている俺の耳には届かぬ台詞ではあったが・・・

俺の働く会社には社員食堂なるものが存在する。

その日替わり定食は外で飯を食うより半額の値段で食べられると  
いうことでそこそこ人気だ。

何故そこそこでしか人気がないのかというと、

「うげえ今日も揚げ物かよ」

そう、食堂調理の手抜きなのかしらないが圧倒的揚げ物の多さ。こ  
つてりとしたものが多い。  
その結果女性社員には不評で、よく弁当持参で屋上にたむろするの  
を見かける。

今は冬なのでどっか適当に場所見つけて食べてるんだろっけど。

「とりあえずAセット」

と、から揚げをチョイス。

「俺はBで」

対する先輩はカツ丼。

そういつて先輩は財布を取り出した、今日は先輩のおごりだ。

手刀で意識を刈り取られ白目を剥いた俺に対して昼飯を奢るだけ、  
というのはふてえ野郎だが、仕方ない。俺は平和主義者なのさ。

トレイを片手に窓際の席は・・・残念埋まっている。  
仕方ない、中央右よりの席を陣取りそこに座った。

「いただきます」

最初は味噌汁で口を湿らしから揚げに箸を伸ばす。  
・・・うむ、うまい。  
ただ揚げ物だけなのはいかなものか？

「さつきは何を悩んでいたんだ？」

先輩が備え付けのお新香に手をつけながら聞いてきた。  
どうやら頭を抱えて唸っている俺を不思議に思っているような感じ  
だった。

「俺が深く悩みこんでたらだめですか？」

そう思われるのも癪なので少しジト目で講義の声を上げた。  
といつつも俺の眼力程度では先輩をうるたえさせる事など到底出  
来ない。  
犬を相手ににらみ合いした方が成功率はよっぽど高いだろう・・・  
やらないが。

「ああ、お前結構即決タイプだったよな。お前がそんなに悩むのは  
よほどだろう？」

そんな事は・・・あるな。

なるほど、だからよく悩みが少ないとか言われるのか。  
一人納得したもののどう説明したらいいものか、少し考える時間を  
もらったためコップに入った水を一息で飲みほす。  
再びコップをトレイの上に置いたとき、腹を括って全てを打ち明け  
ようと思った。  
というのも俺の体質を知っているのが先輩くらいなものだからであ  
る。

俺は今朝あったことを全て話した。

幽霊がまたもや現れたこと

その幽霊が銀髪の美女だったということ

そしてその彼女に一目ぼれをしてしまったということ

食堂で話す会話ではないなと思いつつながら、先輩に語った。  
そして俺が忘れようとしても忘れられないということも。  
それを先輩は訝しげな表情を浮かべることもなくまじめに聞いてい  
る。

なにこの人、かつこいい。

「呪われたんじゃないか？」

俺の話が終わった後、いつものように口を触れながら俺が現時点思  
っていたことを実に分かりやすくいった。

そりゃ誰だってそう思う、俺だってそう思う。  
しかし……

「俺もそうは思っちゃいるんですがね、どうにも」

思っただけで現実化するなら世の中どんなに幸せだろうか。  
世界はハーレムで包まれるだろう。

「不毛なことだとは分かってはいるんですよ。幽霊に恋するなんて  
漫画の登場人物に恋するのとなんら変わりませんからね。いや、む  
しろバッドエンド用意されてる分だけ幽霊のほうがたちが悪いかも  
しれませんね」

それでも……と俺は続ける。

あの時出来た気持ち、その思いは間違いなく俺の心から生まれたも  
のだと信じている。

それだけは否定されたくない。俺はこの思いを大切にしたい。この  
一世一代の憧憬にも似た恋心を。

「で？どうしたいんだ？」

先輩がそう聞いてきて俺は少しあわてた。しまった完全に自分の世  
界に入り込んでしまった。

さて「どうしたいか？」か……どうしたいんだろうな、俺

バッドエンドしか用意されてない道に行くか行かざるか、つまりは  
こういう質問だ。

本来なら見えてる地雷を自ら踏みにいく必要はない。

「わかりません。ただもう一度、会うだけでいい。会いたい」

そしてそれが出来れば苦労はしない。

その地雷は見えているものの、その向こうには俺が求めてやまない  
ものが存在する。

俺はその姿を齒軋りしながら見るしかないのだ。

だから最後に一目、そう区切りをつけたいのかもしれない。

二人の中で短くない沈黙が続く。

本当、食堂で何を話してるんだろう。

俺はこっそりとため息を吐いた。

「お前シューティング好きだったっけ？」

と、先輩が突然話題を変えてきた。  
なんだ？ いったい何の話だ？

「いや、好きじゃないです」

残念ながら俺はシューティングが大の苦手だ。

小学校のときギャラガやツインビーなど、ファミコン特有の高難易度を最初にやったばかりに俺の心をぽっきり折られた代物だ。

残念ながらもそのトラウマが俺の中にはある。

そんな俺の返事を無視して先輩は執拗にシューティングゲームを勧めた。

「東方Projectって知ってるか？」

「はあ、俺の中での東方はアジアだけです」

若干引きながら俺は答える

「そうか、知らんのか」

だから何なんだよ。

とりあえず、先輩の話聞いて三行で答えるなら。

- ・音楽がいい
- ・綺麗且つ優秀な弹幕ゲーム
- ・キャラもいい

の三点。とりあえずお前もやれのな。

そうだった先輩はコアなシューティングゲームだったなあ  
なんかまえ生き生きと『蜂』倒したとか言っていた……蜂？

「シューティングゲームはいい。集中力がつくし、その瞬間だけが何でも忘れられるぞ、色々な」

そこまで言われて俺はようやく気がついた。

先輩は彼女とは別に、より興味を持つようなもの作ったらどうだ？  
と言って来ているのだ。

まあそうであったとしても

「シューティングだけは興味は持ちませんよ」

「前貸した神威どうした？」

「埃が友達」

「しね」

ま、先輩が俺を心配してくれてるとわかっただけでも御の字か。

とりあえずシューティングも前向きに検討しよう。ありがとつぎぎ  
いますよ。

感謝の言葉を口に出すことなくかみ締めつつ、俺らはくだらない言い合いをしながら食堂を出て仕事場へと戻っていった。

その日の帰り、仕事が終わり今日は家で何食おうかなと思いを馳せていると

(ん？部屋の電気がついてる？)

アパートで一人暮らしをしている俺をいつも出迎えてくれるのは常に冷たい暗闇だった。

嫁がいればさぞかし楽だろうに、普段そう思いつつも一人の気楽さを満喫していた俺ではあったが今日に限って部屋の電気がついていた。

(友達でも勝手に入ってきたのかな？もしくは電気を消し忘れたか)

俺はそう思いながら部屋の扉を開け——固まった。

・すでに部屋には先客が居た。

いや、それは選択肢のひとつにあった。

・その先客は女性だった。

俺の母親かもしれん、今は彼女いないしな。

・その先客は見ほれるような銀髪をしていた。

なんじゃそりゃ？

そう、まさになんじゃそりゃ。それ以外の感情が湧いて来なかった。

今朝に見た女性の幽霊。

その彼女が今実体を持って優雅にお茶なんぞ啜っているのである。

陸地に打ち上げられた魚のように口をパクパクさせている俺に彼女が振り返る。

視線があつ。

ごっり

笑いかけられた。

どばぁぁん!!!

反射的に扉を閉めアパートの部屋の番号を確認する。  
大丈夫だあっている。間違っているのは彼女のほうだ。  
いや、それとも俺の頭がネジがなんか間違っていたとか？

状況を正しく認識できない。

意味不明な羅列記号が俺の頭を埋め尽くし過負荷をかけていく。  
やめてくれ、俺の頭はそんなによくねーんだ！

傍から見たら気持ち悪いくらいに狼狽している俺の混乱をさらに  
回りヒートアップさせたのは部屋の中に居る名も知らぬ美女だった。  
先ほど蝶番が壊れてしまうほど激しく閉めた扉が開き、銀髪の美女  
が顔を覗かせた。  
一歩後ずさる俺に彼女は声をかけた。

「入らないんですか？」

綺麗な声だった。聞いただけで背筋を伸ばしてしまうような。

『女教授』そんな言葉が俺の中に瞬いた。  
もしかしなくても『痘痕も笑窪』状態。彼女の行く全てが好意的に  
感じる。

うおー静まれおれー

そしてその言葉に反応することが出来ずに呆然とする俺に彼女は言葉が続ける。

「立ち話もなんです。中で座ってお話しませんか？」

と、部屋に手招きする。

そこは俺の部屋・・・という突っ込みは脳内で完結し、俺は混乱の収まらぬまま自らの部屋に入ってしまった。

2話 なんじゃそりゃ？（後書き）

やべえ

ばれるビジョンしか浮かばない

人知れずこっそりやろう

### 3話 いい脚本家になれるぞ俺（前書き）

仕事の時間だからさっさと投稿、後主人公の名前決定  
でもないほうがよかったような気がする

えーりんマジ高嶺

こっからすこしずつ攻略していきます

『（相手が）攻略される』の方が好きな人はちょっとつらいかも  
少なくとも永琳はがんばって落とします、他はしらね

### 3話 いい脚本家になれるぞ俺

家に唯一のテーブルになんともたまらない玉露の香りが漂う。

かく言う俺の前に湯飲みがおいてあるのだが、俺は手をつけずに正座のままじつとその湯飲みを眺め続けていた。

家なのに何故正座？

とか

早く飲んでしまわないと香りが飛ぶ

とか

今はそんなことミジンコの生態系と同じくらいどうでもいい。

そんなことよりこの家の家主よりゆったりと寛いでいる女性のほうが問題だ。

いや、問題ではないんだよ。

むしろ俺が今日半日『こうなればいいなあ』とか思っていたことが現実になった、実に喜ばしい。

だが考えて欲しい。

例えば一匹の犬が大空に思いを馳せていたとしよう。

その犬は鳥のように自由に飛びたかったのである。

しかしそんなことは犬には出来ないし、もっというとな羽もないのにどうするの？と諦めていた。

そんなある日、いつものように縄張りを練り歩き、一定間隔で生え

ている細長い石の塔にマーキングを施してい時、突然その犬の体から羽が生えて大空へと羽ばたいたのだー

どうよ？その犬までもでいると思うか？

俺は思わん。

突然の出来事にあわくってキャンキャン吼えるか、飛び方も分からず自然落下するのが落ちだろう。

そして俺の状況はまさしくそれだ。

突然の出来事にあわくってキョロキョロと挙動不審に視線を動かし、対応の仕方が分からず沈黙するのが精一杯。

とある小説の登場人物でキヨンという高校生が自ら宇宙人だと証する長門に対して「正直言おう。さっぱりわからない」と放った台詞は今の俺にぴつたりと当てはまる。

そういえばシュチエーション的にあの状況とまったく一緒だな、実にめでたい。

こんな状況下に追い込まれた人間の最善策がすでに文章化していたなんて、心よりめでたい。

しかしリアルでやられるとこんなにテンパるとはな。キヨンお前すごいよ。

いやいや、状況をとにかく好転させないと、とりあえず教科書通りお茶飲んで褒めよう。それが一番だ。

そう思い湯飲み到手伸ばし、動きを止めた。

自分の部屋に違和感を感じたのだ。俺の部屋、こんなにきれいだったか？

そう思ったとき彼女が声を上げた。

「ああ、ごめんなさいね。この部屋少し不衛生でしたから、掃除させていただきました。ものの配置は変えてないつもりですし、なんでしたら元の状態に戻すことも可能よ?」

あれ?俺まだ何もいつてないよ?

「ふふ、不思議そうな顔ね。けどあなたの顔にかいてあるわよ?」

うん・・・うん?

あれ?これ俺が分かりやすいって話なの?

それとも彼女の洞察力が異常って話なの?

今度は俺の頭が幾何学模様で埋め尽くされる。若干『?』が多いのがご愛嬌。

そんな俺をくすくす笑いながらすつと体の姿勢を整えた。

その仕草に俺は少なからずときめいた。さて、俺今日でなんどくらいときめいただろう?

「では自己紹介からいきましようか。私は永遠亭、蓬萊山輝夜に仕える月の民『八意 永琳』と名乗っているわ」

そういつて柔らかい風が頬を撫でるようにふつと微笑んだ。

一瞬くらりときたが顔を引き締める。

「は、お・・・私は『槐さいかち隆治』と申します」

そしてこれが彼女との初めての会話だと気づいたのは、もう少し時間を要することになる。

彼女が部屋を出て初めて俺は足を崩した。  
今首を左右に曲げるといい音がなりそうな気がする。

「ふう」

緊張した。心臓がいつもの1・3倍のリズムで鼓動を刻んでいたんだろうと思う。  
これは夢じゃないかと何度も自問自答したし、こっそり太ももの肉をつねったりして確かめたりもした。

今彼女は晩御飯の食材を買いに行っている。  
どうしてこうなったと言われれば、俺が腹減ったからだ、というしかない。

いや、本当は外に晩飯を誘ったのだ。時間的にも彼女もそろそろ腹減る時間だし。

しかしそんな俺の提案を彼女は『のー』といった。彼女いわく

「外の世界の食事に期待するべきところはない」

とのこと。俺らは某英国人か！

文句ひとつでも言ってやろうかと思ったら「だから自分で作る」と宣言した。

本来なら俺も付き添って荷物を持ち、お金も無論俺がはらうべきだ。そう、たとえ彼女が少々奇抜な外観センスを持っていたとしても。

しかしそんな情けない事に俺はとにかく時間が欲しかった。彼女『  
八意さん』からもらった情報を整理する時間が。

彼女との自己紹介したとき、正直彼女の話の内容はまったく分からなかった。

永遠亭？

定食屋さんか何か？

蓬萊山輝夜？

どっかで聞いたことあるなあ

月の民？  
意味不

分かったのは彼女が『八意 永琳』ということだけだった。  
そんな俺に対して彼女は一つ一つ丁寧に教えていった。

いわく永遠亭とは蓬莱山輝夜と呼ばれる姫が居を構える場所で、普段は病院として一般に開放されている。  
そして月の民とは遠い古の時代に地上の穢れを恐れて月に移民したものの事を指すという。

彼女が言っている事を全て鵜呑みにするのなら、月から降りてきた宇宙人という事になる。

やべえ、さっきのシュミレーションは設定すらも合っていたということか。

事実は小説より奇なりだなあ。

と、ここで自分の身に起こっていることがひどく他人事のように感じたのだ。

正直に言って醒めたといっても過言ではない。  
だってそうだろう。あまりにも話がとつぴ過ぎる。

自分のことを月から来た宇宙人となのつたなら、それなりの証拠とやらを提示してくれなければそうそう信じようとは思わない。

「八意さん、そこまで説明してくださってありがとうございます、生憎・・・私は永遠亭や蓬莱山輝夜姫。ましてや月に人が住んでいたとは全く聞いたことも見たこともありませんが」

というわけで俺も少し探りを入れてみることにした。

こう言われれば彼女も何かしら情報を提示してくるだろう。

彼女はいったい何のために俺の前に現れたのか、それは今のところわからない。

最初の出会いがあんな形だし、堅気ではなさそうだし、なによりいきなり俺の部屋に入り込んで『種族：月の民』を真顔で言う人物である。

・・・正直ドッキリって言われたほうが安心する様な展開だ。

収まらない混乱をよそに彼女は少し疑問に思ったように言葉を繋いだ。

「『幻想郷』というのは知らないのかしら」

「『げんそうきよう』ですか。いや、お・・・私の辞書にはそんな言葉ありませんが」

「あら、そうなの？それなりに有名になってるって聞いたんだけど」

「はあ？有名、なんですか？」

「いいえ、こっちの話よ。そうね・・・では続けて話をしましょうか」

そういつて彼女は右手を豊満な胸の位置にまでもっていき、掌を上に向けて

「っ!？」

思わずのぞけると、同時に理解した。

何故生霊姿の彼女がこの俺にも目視することができたのかを。

彼女の掌には高純度の霊力が塊となって浮いていた。

俺が50年の歳月をかけても到達しきれないと思っていた物の完成形が目の前にあった。

「これはそちらにも多少馴染みがあるでしょう」

彼女はさも当たり前のようにこういった。

確かに俺には多少だが霊力が存在するが馴染みあるかと言われれば「そんなのある分けない!」とやってやりたかった。

しかしそれ以上に、俺は今ある現実を受けとめるのに精一杯だった。そんな俺の沈黙を彼女は肯定ととり、話を続ける。

「私の現状の居場所は『幻想郷』と呼ばれるところに存在する。そこは人々が忘却の彼方へ追いやった様々な物の終着点。時には妖が、時には神が、そして時には人すらも。幻想と化した全てのものを受け入れる郷。忘れ去られた存在や技術が支配する魔境よ」

彼女は手に平にある霊力の塊の消し再び言葉を紡ぐ。

「そして私はあなた、槐 隆治を幻想郷へ誘いに来た」

そういつて、彼女は先ほど霊力を消した手をこちらに差し出した。それは母親が小さな子を正しく教え導く手のようにそれは嘆きの亡霊が黄泉へと引き摺る手のようにそれはこちらを誘い込むように差し出した

「あなたの答えを聞きたいわ」

俺は反射的に彼女の手をとりたかった。感情の赴くまま、先のことなど考えず、己の欲望に忠実に行動したかった。

しかし俺の理性がそれをとどめ、その疑問を口にした。

「……何故、俺なんですか？」

訳がわからない。

確かに俺は霊力を持っている時点で他の人よりは違うのだろう。しかしそれでも俺が選ばれる理由ではない。

となると本職に霊媒師をやっている人なんかどうだって話にもなるし、徳の高そうな坊さんとかいの一番に呼ばれるべきだ。

俺の疑問に彼女は俺を覗き込むように見て、

「私の遠い昔の縁よ。そしてあなたはその血筋。あなたの魂、霊力、そして遣伝子構造にいたるまで、その類似点が多すぎるわ」

しかしそれは俺以外のものを見るように彼女は答えた。

「そして私はあなたの影を追ってここまで来たの。納得できたかしら？」

ああ、納得したとも。

それと同時にひどく失望した。

そう彼女は目の前に居る『俺』には目を向けず、名も知れぬ奴の影を俺に合わせてみていただけだったのだ。

そりゃそうさ、そうじゃなきゃ彼女ほどの人が俺になんて手を差し伸べてくれるはずなんてないのさ。

なんだ、なんだ。かつこ悪いな俺。

勝手に一人で舞い上がって、勝手に一人で落ち込んで、情けない。

思わずため息が出た。

「どづかしら、そろそろ答えが出た『クー』で………」

と同時にお腹がなった。

そういえば緊張で色々忘れかけてたが、そうだ。俺は帰りながら晩飯の献立を考えるほどにお腹がすいてたのだ。

「……………」

・・・ベタだ、気持ちがいいくらいベタ過ぎる。いい脚本家になれるぞ俺。

先ほどのブルーな気分がふつとび変わりにきたのがレッド。ハイテンションな主人公のように俺の顔を真つ赤に染めた。

なんとも言われぬ沈黙が場を支配したが、それはふつくらとした笑い声が遮った。

上目遣いで彼女を覗くとクスクスと実に上品に笑っている。

うっ、かわいい。

なんだろう？ギャップ萌えというやつだろうか。

スラリとした性格をした彼女がコロコロ笑うとはそれだけで破壊力がすさまじい。

俺は気恥ずかしさと照れを誤魔化すために、破れかぶれに彼女を晩御飯に誘ったのだった。

そして冒頭に戻る。

さて、話をまとめようか。

彼女が言っていた幻想郷とは

- ・忘れ去られた人・神・妖が行き着く場所
- ・今はなき技術や存在がある場所
- ・なんか魔境

……あれ？これ黄泉の国じゃね？  
俺？死んじやうの？

忘れられたら逝っちゃうって……死ぬ以外のこと想像つかないんだけど。  
とりあえずこれは保留だな。分からないことが多すぎる。

次に月の民。

月は確かアポロ11号だったかなんだかが月面に旗をさしたらしいのだが、その歴史的偉業は真実か虚言かで二つに分かれている。月面着陸した映像は偽者だったとか、月面に到達した彼らを待ち受けていたのは月に潜む宇宙人だ、とか。

あながち嘘とは言いきれないものがある。  
確かに人類は宇宙望遠鏡や人工衛星で広い宇宙を知ることが出来たが、それでももし宇宙人とやらが存在するのならその技術力はまだまだ拙いのだろう。

(それに、実際俺が見たわけでもないしな)

本質的に俺は自分の目で見たもの信用する。

他人の話した説明や映像はその人の主観が入るため、どうしても何からのフィルターを通してでしか見ることが出来ない。

（突飛であるのは否定できないが、突飛すぎて逆に信憑性があるよな）

どこの世界に自分は宇宙人だ真顔でいう人物がいるのであろうか。すくなくともこの日本ではそんなこという馬鹿は鉄格子のついた病棟の一角で体育座りしてることだろう。

がちゃり

そう思ったとき彼女が帰ってきた。

「今戻ったわ、さあ今日はお鍋にしましょうか」

なるほど、もし今嫁が出来たらこんな風な生活が可能ということか。素晴らしい、実に素晴らしいぞ！

しかし、なんとも早かったな。俺の家から一番近い場所にあるスーパーといえども結構時間かかるのに。

飛んででも来たのかというくらい早かった。

しかしそんな疑問は彼女の作る鍋料理の前にはあまりに矮小、俺は彼女の鍋に思いを馳せた。

ちなみに魚介鍋だった。

幻想郷では珍しいらしい、そんなもんか？

味は・・・京の祇園に出されても違和感がないどころか、板前が土下座して「弟子にしてください」といつても俺は全然不思議には思わない程うまかった。

なるほど、悔しいがこれならば「外の世界の食事に期待するべきところはない」と言われてもしかたないだろうね。

その間何度か答えは出たかと言われたが話は保留にしておいた。

俺はまだ彼女の話をして信用したのではない。

勿論別に鍋を食べるのに夢中だった訳ではない、あしからず。

### 3話 いい脚本家になれるぞ俺（後書き）

お気に入りをしてくださった皆さんへありがとうございます！

1話投稿してお気に入り登録0ならずぐさま黒歴史へ葬り去るところでした

おかげさまで逃げ場を失いました、うぼあ

でもお気に入り登録してくれるとすごくうれしいです

やる気あがりますよね！

みんなあとがきで「感想よろ！」とかいうのすごくよく分かります

私ももらったらさぞかうれしいでしょうね

でも同時にptあがりますよね

うれしいと感じると同時に悲しみを背負うなんて役得ですよね！

4話 おかしいな、話が噛み合わない(前書き)

実を言うとタイトル適当に決めました。  
どんくらい適当かというと

『東方槐無夢』

どう読みますか？

はい、俺も読めません。

今のところ『かいぶむ』ってよんでる

#### 4話 おかしいな、話が噛み合わない

「うぐう・・・」

外が騒がしい、早朝騒がしいのはスズメだけにしてくれ。

選挙活動もこんな住宅街なんかより大通り出た方がいいんじゃない？  
そもそも車から選挙活動って何様？市民の事考えるのなら地に足つけて俺らの視点から物を言え馬鹿者。

カーペットの上を転がり毛布を被りなおすも、体の節々が痛い。

やはり布団が欲しい、カーペット越しとはいえ直接寝るのはつらいなあ。

つーか今何時？

んー8時30かあ

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はっ!?!?」

がばりと跳ね起きる。

こんなに悠長に寝ている時間じゃない!

クラリと軽く目が霞む。低血圧はこれが辛い、頭に血が足りない。目の前を霧が張った様に白く霞む、しかしそれは一時的なもので10秒も待てば次第にそれも晴れていく。

早く仕事に……っああ？

「そつだ、今日や休みだ」

なんてお約束をやってしまったんだろう。

俺は自分の失態を誤魔化す様に軽く頭をかいた。

すでに脳みそに血の通って意識もはつきりしてきたので、再び毛布に包まるという選択肢は間違っているだろう。

ふと窓の外に目を向ける、外はまだ少し騒がしい。

おそらく登校時間になった学生が騒いでいるのだろう、朝っぱらから元気だね。

ポーっとまどろみの余韻を楽しんでいると、いい香りが鼻をくすぐる。

どうやら彼女は既に起きて朝食を作ってくれてるようだ。

素晴らしい素晴らしい素晴らしい、これは実に素晴らしい素晴らしい

昨日魚介鍋を食べ終わった時、それを待ちわびたかのように彼女はこう切り出した。

「悪いけどあなたの答えを悠長に待っている時間はないの。期間は今日を含めて七日間、幻想郷に来るべきか来ざるべきかの答えをそれまでに出しておくなさい」

彼女は食べ終わった箸や皿をまとめながらやや厳しく言った。それだけ重要事項なのだろう、彼女の目は俺を捉えて離さなかった。とはいえ七日、一週間か……一週間、少なくないか？

「七日間ってずいぶんと即急ですね、その日数でないといけない理由でもあるので？」

「ええ、幻想郷には管理者が存在して彼女が提示した日数がこの期間。これを過ぎる締め出されるわね。地力で帰るのは少しばかり面倒よ」

そういつて彼女は洗い物をまとめて台所へ向かった。

「今日残った鍋は明日の朝おじやにして食べましょう」と彼女が片付けの作業をしながら提案する。

ああ、実に楽しみだ。俺はそう答えてごろりと横になった。

なるほど、そういう理由か。

しかし理解は出来たが俺は到底納得できない部分が存在した。

幻想郷という場所には管理者が存在し、その人物が忘れ去られた物や存在を選別するのなら、何故彼女は八意さんの行動を容認したのだろうか？

俺は別に孤高でもなければ差異者でもない。それなりに社会に溶け込み、それなりに身を置いてる。

そんな存在が忘れ去られた幻想の居場所に行くだって？前提条件からして間違っではないだろうか？

それとも何か、俺が話したところで与太話として処理してしまう気か？

くそ、『管理者』そんな存在がいなければ俺も疑問なんて持たなかったことだろうに。

ガリガリと頭をかく。

しかも驚きなのが俺に一週間とは言え猶予を与えていることだ。

ただ彼女が何かしら駒を欲しがるだけなら簡単だ、攫えばいい。

連れ去る場所は比喻でもなんでもなく、正しく忘れ去られた郷だ。

絶対に見つかることのない場所だといえる。

俺がいたという証明も月日と共の剥離し、微分化していき、最後には消えるのだろう。今回の様に猶予を与えるよりそっちの方がよほど機密性を高めている。

そうして俺もめでたく幻想と化す、めでたしめでたくなし。

しかし件の管理者は俺に猶予を与え、選択肢まで用意している。

問答無用で攫うことと比べれば破格の待遇、いやもはやそんなレベルではない。これは変革と違っていい。

幻想という郷の変革、異様にきな臭い。

さらに言うなら八意さんが嘘を言っている可能性。

俺をどこぞに身売りしてやろうと考えるなら実に都合がいい。

一週間という期間に自らの近辺を整理整頓してくれるのだ、後始末が実に楽だ。

厄介だ、非常に。

どう転んでも俺に厄介ごとしか降りかからない気がしない。

面倒なのか？そうか、じゃあもう答えが出てるんじゃないのか？と自問自答する。

もちろんだとも、断ればいい。簡単じゃあないか。

だが俺はかちやかちやと軽い音を立てて洗物をする彼女の横顔を見つめる。

月光のように澄んだ白銀の長髪に、それを同化したかのように写る白陶器のような肌。

すらりと美曲線を伸びる鼻先とふっくらとした唇、そして彼女の瞳は横顔から見ても吸い込まれそうに大きく、美しかった。

そうだとも、厄介ごとが来るなんて彼女が来た時点で分かっているし、それで納得出来るのなら俺もこんなに迷ってない。

ああくそ、この自問もいったい何回したことが。いい加減はつきりしろ、いつもの俺じゃないぞ、俺！

ごろごろと悶絶する。

満腹に食べ終わったばかりで膨れ上がった胃は抗議の声はあげるも全て無視する。あーうーどうするよ俺え・・・

と、そこではたりととても重要な事項に気づいた。

「そついえば八意さんは期限来るまでどうなさるんですか？一旦幻想某に戻るの？」

「いえ、その予定はないわね。二度手間だし面倒なもの。七日の間は適当にこの場にとどまるわ」

鍋で使った皿を謎の技術で半瞬かけず汚れを消し飛ばしながら、彼女は淀みなく答えこちらに目を向けた。

「嫌なら私はどこか宿でも取るけど・・・」

全力で拒否した、それはもう体全体を使って。

そうして俺は同じ部屋で一夜を共にしたのだった。俺が床のカーペット、八意さんは俺のベッドで。

別に何かしら如何わしいイベントはなかった。まあ当然ではある。

しかし今日から後六日間とはいえ八意さんと同居できるのだ。鼻歌でも歌いたい気分だな。

と、その時俺の携帯電話がけたたましく鳴り響いた。

『刑部 先輩』

あれ？先輩からだ。

今日は先輩は仕事じゃなかったっけ？と疑問に思いながら携帯に手にとり通話ボタンを押した。

「はいもしもし、槐ですが」

『ああ、今起きたか？』

「いや、大丈夫です。それでなんすか、先輩今日仕事ですよね？」

『ああ、いや・・・そうだな』

先輩にしてはいやに歯切れの悪い言い方だった。

今頃携帯片手に唇を撫でていることだろう、実に分かりやすいなあ手に取るようだ。

そんな上機嫌且つ余裕綽々な俺に先輩は突然冷水をぶっ掛けてきた。

『もしかするとだが、八意 永琳って女性がお前のところに来なかつたか？』

.....

数秒、俺の思考はショートした。

数々の疑問が振って湧いてきて収拾がつかない。

いかん、だんまりはまずい！何か話さなければ！

俺は手当たり次第に湧いてくる疑問の一つを手に取り投げつけた。

しかしその疑問は非常に全うでありながら、今言っではいけない疑問ワースト一位だったと、後で気づいたのだった。

「なんで先輩が知ってんですかあ!!!」

その俺の叫びに先輩はため息と共に答えた、やはりお前か・・・と疑問符が頭の周りをくるくる回っている俺に先輩はこういった。

「テレビでも見てみる、あーチャンネル8だ」

その台詞に迷わずテレビのリモコンに手を伸ばす。

そして見た。

今台所に立っている八意さんが買い物袋を片手に、何も付けず大空へと飛んでいく映像を！。

「や、やごころさああああああああん!!!????」

先輩の事も忘れて大声で叫んだ。電話越しに何か叫んでいるが、もう知るか！

今の俺はこれ異常なくらいに混乱している、というか最近混乱してばかりだな俺は！

とにかく俺は混乱をどうにかして欲しかった  
納得する理由が欲しかった  
解決するべく答えが欲しかった

だからこそこの混乱の大元凶である八意さんに駆け寄った。  
今の俺にはそれしか考えられない。

「や、八意さん！て、てててれびい！」

声が異様に震えるが俺は一切気にかけない。

冷静な自分が「なに言葉を囁んでるんだ」と失笑する。  
しかし今は気にかける事項がでか過ぎてもう何がなんだか分からない。

そんな小さなことには目移らないのだ。

うおー

そんな俺を彼女は『？』で答え、今しがた見ていたテレビの画像に視線を移し、

「あれが？どうしたの？」

とおっしやられた。わふー、くーるびゅーていー

「いや、どうしたもこうしたも！何飛んでるんですか！つーか飛べたんですか！？」

あれ？おかしいな、話が噛み合わない。

そもそもおかしいのは彼女か？俺の方がおかしいのか？

俺ら人間は何にもなしに空を飛べたか？

………うん飛べない。

じゃあ、おかしいのは彼女だ。そうだそうに違いない。

「おかしいですよ！やごころさん！」

再び部屋に俺の絶叫が響き渡った。

「靈力で空を飛ぶのが普通ではないの？だったらどうやって地上の民は月へ到達出来たのかしら？」

「純粹科学力で宇宙へ昇ったんですよ。そもそも靈力なんてここでは稀有な代物なんです。俺ですら珍獣扱いされるんですから」

「え？そんな！地上の民は結局靈力と科学の融合がないまま成長したの！？………なんて、原始的な」

まずそこからか、彼女はあまり俺たちが住む世界に興味なかったのかもしれない。

となるともし俺が幻想郷に行ったと仮定したら、あっちの常識に馴染めるのかという問題だ。

霊力で空を飛ぶ事が常識の世界だと考えると他にはどんなものが常識だろうか？

幽霊に絡まれて世間話するのが常識とか？

それとも死んだ人間が生き返るのが常識とか？

・・・どちらにせよ、あまりこちらの常識に捉われてはいけないな、まだ行くなって決まっていけないけど。

その間、八意さんは驚きの声を上げた後「・・・そうか穢れが・・・」とか「・・・だからこれほど時間を・・・」と呟いていたが、俺はふと別の懸案にぶつかった。

何故先輩はピンポイントで彼女の名前を言い当てたのだろうか？

部屋の隅に転がった携帯を眺めながら俺はそう考えた。

八意さんと朝食を取った後、俺はノートパソコンを開けてネット回線を繋げる。

ちなみに八意さんは俺の部屋においてある小説を手にとって読んでいる。

速読というのだろうか、司馬某作の分厚い本で、一ページに細かい

文字が2行にわたって出来たものなのだが、ほんの10秒ほどで次から次へとめくって行く。

いや、幻想郷ではこれが常識なのかも・・・と自分を納得させパソコンでニュース項目を開けた。

『スーパーマーケットに飛来するする女性!？』

市のスーパーマーケットで、夕飯の食材を求めにやってきた主婦のなかに、空中を浮遊して来た女性が、買い物をして再び浮遊して帰宅するという事態が起きていたことが明らかになった。

一部始終を撮影していた一人がウェブサイトに掲載、そのコメントのなかで「空から降りてくる少女シタを探すために空を見上げたことはあるが、実際に起きるとは想像もしていなかった。幻想郷は幻じゃないんだ!」と述べている。

19日午後6時15分ごろ、スーパーマーケットのもっともピークに達した時、一切の飛行器具らしきものを持たず、買い物袋片手に東方Projectの登場人物の1人『八意 永琳』と思しき人物が、空中を文字通り滑空して訪れた。

その場に居た100名近くが絶句する中、八意 永琳と思しき人物は魚介類や葱、白菜などを買い込んで、再び夜の闇に消えていった。

東方Projectとは、同人サークル『上海アリス幻楽団』の作品群の総称であり、主にZUN氏が制作している「弹幕系シューティング」を主軸としている。

ニコニコ動画という情報媒体を主軸に、巷でささやかながら急速に広まったゲームの一つであり、八意 永琳と呼ばれるキャラクターはそのシリーズの一つに登場するボスの内の一人である。

何故この場所に現れたかは、完全に不明となっており、製作者のZ

UNも口を噤んでいる。』

東方Project・・・

シューティング好きの先輩がやたら押ししていたゲームだったか、なるほど道理ではれる訳だ。

昨日に見た幽霊の話の話を逐一先輩に報告したからばかりだったかな、もしかしたら先輩は八意さんのことを知って進めたのかも・・・いやそうだろう、あの先輩だからなあ。

試しに幻想郷で調べてみたらwikiが頻繁に更新されるほどに知名度は高いらしい。

調べてみると、なるほど・・・わからん。

冥界、妖精、吸血鬼に閻魔。

確かにそれは幻想だろう、昔の文献に載っているだけで今の現代社会は居るとは真に受けないだろう。

というか昔の話でも『いた』と真に受けるやつなんて居ないだろう。

ちらりと外を見ると、相変わらず騒がしい。

後で改めて外を見たら、騒がしいのは登校中の学生ではなく、多くのいい大人がカメラやビデオを片手に、犬のように走り回っているのだった。

中にはプロも混じっているのだから笑えない。

ごついアンテナつけたワゴンが牛歩のスピードで走っていて、しかも中の人間は全てのものが不自然に見えるのか、一箇所に視線を写すということをしてない。

確かにここは住宅街で車の往来はほぼないが、一言やめてくれといいたい。

俺はため息を一つもらしてパソコンの電源を切った。

調べた所、幻想郷の管理者は『八雲 紫』という妖怪らしい。  
妖怪って・・・なんだよ、とも思ったがそういうものなんだから仕方ないんだろう、俺にはさっぱり理解できないが。  
俺はごろんと横になる・・・あれ？頭に枕が置いてある、こんなところに置いたっけ？

ちらりと八意さんに目を向ける。

目が合った。

笑いかけられた。

視線を外した。

ゴホンッ！

この八雲はいつたい八意さんをどうするつもりだろうか？  
たしかに八意さんは大きく行動をとってその存在を世に知らしめた。それは幻想郷の理に反するはず、だがその一方で東方Projectという幻想郷ほぼ同系列の話を容認している。  
つまりこれは同列とは言え本質が違ったため放置したか、もしくはその行為そのものが幻想郷に利する事ゆえに容認したかのどちらか、か。

前者だった場合どうなるか？

本質は違えどその根本にあるのは『秘匿』だ。

『これほどしか情報の相違が激しいのなら大丈夫』というのは逆に

言うところ『一部分とはいえ相違が合致したら拙い』ということにならないか？

そうなるとう八意さんは非常に苦しい立場になる。相違が激しかろうと、類似するものがあり、それを証明する存在があるなら幻想は幻想でなくなる。

つまり幻想郷の崩壊、それを管理者が許す？許さないだろう。

いや、それ以前に何とかしてこの状況下に火消し行為を行うはずだ。俺ならそうだな、さっさと八意さんを始末して情報の風化を待つのがベターだろう。

昔妖怪が本当に存在していたのなら、今の現状を鑑みたら分かる。

彼らはいつぞや存在しないものとして扱われたのだからな。

では後者ならどうか？

東方Projectという同系列の話が広がって幻想郷が得することとは一体なんだ？

もっとも可能性が高いのは神や妖怪の為に行われているという事だろう。

神や妖怪は人々の信仰なくして存在できないと書かれていた。

神は畏怖や尊敬を糧に、妖怪は恐怖や憎悪を糧に。

人に想われるというのはそれほど重く大切なものなのだ。

人に慕われ神になる、釈迦やキリストの様に。

人に疎まれて妖魔に落ちる、吸血鬼や鬼の様に。

そしてこの東方Projectはそれらの想いを増幅するための神輿として使われたのでは？

そこまで考えて俺は軽く頭をかいだ。

確かに東方Projectは幻想郷の謎を紐解く優秀な資料だが、

あくまでこれはゲームであり現実ではない。

恐らく前者としても後者としても肝心な部分は隠されている可能性の方が高い。

それなら・・・と俺は視線を八意さんに向けた。

（直接聞こうじゃないか、なんせ彼女はデジタルな情報体ではなく、現実に存在する人物だからな）

そして俺と八意さんは、その日一日を幻想郷の話に終始した。

ところで明日の仕事はどういう顔でいけばいいか、誰か教えてくれ。

4話 おかしいな、話が噛み合わない(後書き)

初めて感想もらいました、ひゃっほーい

p tがまたあがったよ！やったねジラちゃん！

.....

身内にはれたらバイツァ・ダスト！

いいや限界だ！押すね！

5話 なんか腹立ってきた(前書き)

ようやく説明臭い文章からおさらばだ！  
なによりえーりん書いて癒されるぜ！

5話 なんか腹立ってきた

カタカタカタ・・・

「八意 永」 「検索」

「何を検索しているのかしら？」

「!？」

「あら？私に興味をもってくれたの？うれしいわね・・・でも」

カチカチカチ

「八」 「検索」

「女の秘密に無断で覗くのはマナー違反だと思っわ」

「・・・はい、すみません」

結局八意さんって何なんだ？

「さて・・・」

たった一日休んだだけだが久しぶりに会社を見上げたような気がする。

5段ほど続く階段の向こうに2箇所ある自動ドアと、緊急事態が起きたら一番に心臓発作を起こしそうな老警備員が両脇を固めている。前から思っていたが、あの警備員何か意味があるのだろうか？人件費削減といっても、これはいかなものか。

・・・まあ皆文句は言わない。誰だって地方に転勤なんてしたくないだろう。結局はしがないサラリーマンなのさ。

さて、それよりも当面の問題は

「まじ先輩になんて説明しよう」

苦虫を噛み潰したような渋い顔を作って、気力なく階段を上る。なんで俺あんな返答したんだろう・・・

しかも折り返しの電話も結局しなかったしな、怒ってるだろうなあ。

頭をガシガシとかき乱す。いや、それだけならいいんだ別に、それ  
だけなら俺もここまで悩みはしない。

先輩がいかに厳しいとはいえど、分別を持った立派な大人であり模  
範だ、話していい話と悪い話の区別はしっかりしている。

早々に他言することがない上に、謝って事情を説明したら済む話で  
ある。

さすが先輩、かつこいい。ただ目つきの悪さが残念。

しかし、

「おい、今度の休みに にいこうぜ」

「なんだよ、あのニユース興味あんのかよ」

「それもあるけど、目撃者情報募集してるらしいんだ。有用な情報  
だと金一封でるらしい」

「マジか！・・・いや、まあそうだよな。この現代社会で魔法が存  
在するかもって言うんだからなあ、聞いた話だとイギリスもその話  
にお熱なんだと」

「あそこはポッター発祥の地だからな。そういうファンタジー的な  
ものに飢えてんだろ」

「はあ！？藤岡あのやろう、この時期に有給とりやがったのかよ！」

「『俺の嫁を迎えに行くんです！』っていつて人事にこり押してた

な。後で見たけど左遷リストにそいつの名前新しく入ってたよ」

「馬鹿じゃねえの？」

「ちなみに俺も明日有給とつた、嫁が俺を待っている」

「おいい！」

これだ。これなのだ。どこ歩いてもどこ見てもその話題で持ちきりだ。

今朝のニュースで見た話だけど、昨日の昼ごろ、魔法を求めた中学生が集団で学校を抜け出したんだと。やめる、これ以上俺をネガティブな気分させるな。

インテリ学者最強の呪文『集団催眠説』にも期待したのだが、目撃者があまりにも多すぎてそいつらも肯定しだす始末、勘弁してくれ。もし俺が幻想郷とやらの誘われていることがばれたら？想像したくないね！

先輩経由はほぼないと信じたい。それじゃなくともでも誰かが『八意さんが俺のマンションに入っていくのを見た』なんて言い出したら・・・

「おはようございます」

「おはようございます」

俺は受け付け嬢に軽く挨拶をしてタイムカードを切りに関係者用の扉を開けた。

うぐい、今日一日俺の胃腸に幸あらんことを。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そして開幕1秒で諦めた。無理だ今日から俺は胃腸薬常用者決定だ。関係者用通路には鋭い瞳、なのだがあまりに鋭すぎてもはや線になつてる先輩が壁にもたれ掛かり、俺の到着をまっていたようだった。思わず背筋を伸ばすように仰け反り、一步引いてしまふ。口元がなんかもう色々な感情が混ぜあわり、不気味に引き付く笑みを浮かべてしまっている。

「・・・・・・・・・・よう」

最初に口を開けたのは先輩だったが、俺は先輩の背後に雌伏す猛獣の影を幻想して返事することが出来ない。ひたすらに不気味な笑みを浮かべている俺をスルーしつつ、腕時計を確認しつつ口を開いた。

「タイムカードの時間、大丈夫か？」

その一言で俺は覚醒した。

まずい、一応余裕を持って家を出たが周囲の話に気をとられ、いつもより進行のペースが遅かった。

「あ、はい。すみません押して来ます！」

俺は慌ててタイムカードを切りに先輩の横を通り過ぎようとして、肩をつかまれ

「今日は購買で飯買って屋上で食うぞ」

と言って肩を切って自分の仕事場へと足を向かわせた。

一方俺は青い顔をしながら俯き加減に立ちつくすしかなかった、もう既に胃が限界だ・・・

もうすぐ聖夜は近い。

女たちはその日に向けて自身を磨き、男どもはその日に向けてお金を貯める。

各社企業はビッグイベントに便乗して様々な企画を立ち上げ、少しでも多くの実績という名の金を欲している。

企業という組織から、社員という個人まで聖夜というイベントに振り回されているのだ。

そして話題の中心は常に聖夜がその場所に居座って、その毎年の現

象は変わらないと思っていた。

それが今変わった。・・・いや正式に言うならば昨日だろうか。街頭映像が飛空する女性を流し、画面が切り替わると魔法というものが存在するかしないかなんて、普段から考えればこいつら全員頭のネジが緩んでいるとしか思えない議論を繰り返している。

しかしそれを眺める遊歩道の歩行者はまじめな顔して、だということに期待に満ち溢れた表情で街頭映像に目を向けている。

それはサラリーマン風の男性だったり、子供を引き連れた一児の母だったり、ジャンクフードを片手に歩く学生だったり、中にはやや肥満型ともいえるリュックを提げた野郎共の集団は鼻息を荒くしていたりもしながらそれを見ている。

そしてそれは俺の働いている会社の中でも変わらない。

一昨日まで爪の手入れに勤しんでいた斜め前に座る2つ年上の笹原さんも、すり鉢といわれヒラの社員から忌み嫌われていた長山係長も、俺の隣座る同僚の上野も皆が皆、魔法の有無について協議を繰り返している。

その顔は初めてサンタクロースを見た子供のように、瞳を輝かせ、時には顔を紅潮させ語り合っているのだ。

その一方俺は顔を青くして頭を覆っていた。

（ぐうおおお、なんじゃこりゃあ！なんで皆こんな事まじめに協議してるんだあ！）

俺が最初に思った事は意外にみんな『東方Project』について知っているということだ。

さらに言つたら隣に座る上野は「えーりん！えーりん！」とか「おま・・・その情報k w s k！」とかなんかよく分からん日本語を使っている・・・k w s k？  
いつも堅苦しいなまでに真面目で無愛想な奴がこんな事言っている。  
っ！かお前は八意さんの事好きなのか？

「ああ！？おいよつく聞けよ槐い。俺はなあ東方Projectも、えーりんも、咲夜さんも、超・大・好き・だあ　　っ！愛していると言つてもいいね！」

「あ、ああ。そう・・・」

「つかー何？その『八意さん』って？東方厨なら『えーりん』だろがぁ！」

といいながら右手を全力で振り始めた。

何だこいつ。というか、いきなり人の名前を言うのか？本人の目の前で？許可もなく？

無理だ、俺は絶対に・・・そもそもこいつも本人目の前にしたらいきなり名前言うのだろうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・いいそうだ。なんか腹立ってきた。  
今度名前で呼んでいいか聞いてみよう。

「おいお前ら、仕事しろ」

その時、歪みないいつもの先輩が瞳を刃の様に鋭くさせて皆をにら

みつけた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

まさに鶴の一声だった。

和気藹々とした仕事場が半瞬にして静まり、残ったのはカタカタと言つキーボードを叩く音だけが響き渡る。

まさに圧巻、下には強いすり鉢係長も一所懸命仕事をしている・・・ふりだと思つ。

かく言う俺も背筋を伸ばし気を引き締めて仕事に入る。・・・尻が痛い。

「槐、飯食つぞ」

誤魔化せないかところり食堂へ向かおうとしていた俺を先輩が襟首を掴んで押しとどめた。

いや、まあ分かつてはいたけど。俺はドナドナを脳内再生しつつ先輩に連れられ屋上へと向かっていった。

ある晴れた 昼さがり 屋上へ 続く道  
先輩が ずるずる 俺を 引き摺りゆく  
かわいい俺 引き摺られて行くよ  
虚しいなひとみで 見ているよ  
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺を 引つ張り  
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺の頭が ゆれる

「そろそろ自分で歩けよ」

「……はい」

## 5話 なんか腹立ってきた(後書き)

大量のタグを見ていいなあと思う

反面、永琳好きな人以外余分に来て欲しくないから現状で満足

さらに言つと俺の駄文が多くの人に见られないから一安s(ry

という訳で仕事行くので短いです、では

## 6話 いこう、幻想郷へ（前書き）

先輩との会話は基本的に時間かかるなあ  
そんなわけでいつもの2倍かかりました

## 6話 いごう、幻想郷へ

屋上に出ると吐く息が白く色づき、本格的な冬の到来を感じさせる。聖夜までの後3日を数えるだけだが、今だ雪がちらつくことはあっても積もることはない。

もう少し北陸にいけば違うんだろうけど、そう思うながらホットの缶コーヒーを片手に身を竦ませた。

俺たち以外の人影は見えない、見えるはずもない。確かに暖房の効いた仕事場は少々頭がボーッとするものの、こんな寒空で昼食を食べる馬鹿は居わけないよね。

「・・・・・・・・・・」

そんな馬鹿が今現在二人屋上で缶コーヒーとサンドイッチを片手に黄昏ている。

いやもつとも今から話す事は馬鹿みたいな場所だからこそ話せるものではあるが。

俺はコーヒーを一口啜り口を開いた。

「先輩東方Projectってご存知でしたよね」

まあ今話題にもなってますけどね、と俺は続けた。

その間先輩は何か口を挟むことなどせず、かといって急かすような雰囲気もせずビルの下を走る車の影に目をやっていった。

「もしかしてですが、俺の見た幽霊の人物が八意さんに似ているって想像ついてました？」

「まあな。長髪銀髪赤青服装なんて俺は八意永琳くらいしかしらん」

その時先輩が始めて口を開き俺の話肯定し、ペリペリとサンドイツチの袋を開封してぱくりと口に放り込んだ。

「しかしお前から話を聞いたその日に、んなことあったなんて想像すらつかなかったよ」

「違いはないですね、特に俺なんか元ネタしらなかったからそうとう混乱したんですよ」

俺も先輩と同じくサンドイツチを開封して一口、シーザードレッシングを主軸にレタスとハムの香りがふわりと広がった。定番ながらうまいなこいつは、個人的にはスライストマトも一切れ入れて欲しいが。

一時俺と先輩との間にものを咀嚼する音だけが響きわたった。俺は口の中のサンドイツチをコーヒードリで流し込み話を続けた。

「実は八意さんに幻想郷へ来ないかと誘われまして」

この言葉に先輩は初めて反応らしい反応を見せた。缶コーヒードリを傾

ける動作が一瞬とまり、再び動き出すという蚊がとまった程度の小さな変化ではあったが。それに構わず俺は続ける。ここから俺がもつとも話したい、相談してみたい事だったからだ。

「後5日間までに俺はここに留まるか幻想郷へ行くかを決めなければならぬんです。しかし・・・」

全て話そう。残念ながら俺は頭の回転はいいほうではない。自分で見たもの聞いたもの信用するというものの場合によりけり、時としてそれが逆に自分という視点のフィルターしか見てないと言うことになりかねない。

それは『独りよがり』ともいえる。たまに面接とかで「自分のことを客観的に見ることができません」なんていうのははつきり言おう、馬鹿だ・・・そうだろう？昔の俺よ。

「自分のこと」というのは置き換えれば自分しか見てないということになる。

本当に客観性がある奴なら多くの人と情報を共有して、そしてそれを自分で纏め上げる技術をもつ。これこそが本当に客観的視野で見ることが出来る人物。

だから今回唯一情報を共有している先輩に全てを話し情報の比較を図りたい、俺は聖徳太子や諸葛孔明ではないのだ。

正確な情報を整理するのならば他者の情報との比較すれば容易く、さらに先輩は素晴らしいことに大人の良識と寛大さを兼ね備えつつ、先を見据える慧眼ももっているパーフェクト超人。

俺なんか及びもよらない決案を出してくれるだろう。

「……という訳です。幻想郷は本来隠蔽し、幻想たるもの。しかし今回はどう考えてもおかしい。その上ではたして行っていいかどうか……」

皆『幻想郷が実在するかもしれない』という懸案に夢中になって他のことには目を向けていない。

確かにもし俺が当事者ではなかったらこんな事考える気すら起きなかった。

ただその他大勢に紛れて真面目な顔で魔法の有無について話すのだろうか？

何故今まで表沙汰にされてなかったものが何故今になって露になったなんて考えただろうか？

そして、映像にうつる八意さんに俺はやはり心をときめかせていたのだろうか？

そこまで考えて俺は軽く首を振り、頭をかいた。

馬鹿らしい、今はifについて考える必要なんてない。

「……俺から言わせれば問題はそこではない」

そう答えた先輩に俺は視線を移す。

先輩はいつものモーションを取り、すっかり冷めたであろうコーヒを一息で飲みきった。

「問題は何故お前か、だ。そしてもう一つは、何故幻想郷を示唆する行動をとったにも関わらず八雲紫が動かないのか、もしかすると

だがこの事態を含めて既に決定事項なのかもしれない」

前者の疑問にはすぐ答えられる。俺の先祖に友好関係があったらしくて、だったか。

しかし後者は正直先輩がいったい何をいつているのか分からなかった。

「ちょ、どういうことですか！つまり八雲紫という人物は八意さんを利用してこんな自体を！？」

「そうかもしれないという話だ、さらに言うならば俺の知識にある八雲紫と八意永琳が本物ならこんな初歩的なミスはしないと思う。設定は確か『妖怪の賢者』と『月の頭脳』頭が切れるとかいう次元の話じゃない。その存在がこの事態を容認しているということは、この状況そのものが幻想郷に被るデメリットを差し引いても行わなければならぬ、その必要がある訳だ」

先輩はそう答え俺に向き直った。

「それがどういったものなのか、情報が少なすぎる今は分からないが幻想郷がこのまま干渉を続けるようならば、お前が幻想郷へ行くうが行くまいがこの世界は変わっていくだろう」

それはそうだろう、この世の中は大きく変わるに違いない。

霊力とか魔力とかいう謎エネルギー、それは単純にこの現代社会が

もつとも危機感を募らしているエネルギー問題の解消の主軸として扱われる。

なんせ霊力とは、加工しだいで一切の飛行機器を持たずしてリアル空中散歩を可能にするのだ。

霊力1に対するエネルギー変換効率はどういうものかまで突き詰められるのであれば、八意さんが呟いていた霊力と科学の融合が可能になるのではないだろうか。

そうなれば、全世界で新エネルギー革命が起こるだろう。この東方の島国を震源地として。

「お前にあるのは視点の違いだけさ。幻想郷へ旅立ち俺たちの世界が変わるのを傍観するか、ここに留まり変化という濁流に飲まれ流されるかはな」

先輩はそういつて俺に選択肢を投げかけた。幻想郷へいくか、留まるかを・・・しかし、

「この変化に干渉するっていう選択肢はないんですか？」

俺がただ時代の流れに流される言い方が癪に障る、断固抗議だ。しかし先輩は俺の抗議を面白そうに鼻で笑った。

「お前が、か？無理だな、到底敵わん。例えばもし、今年正月のK-1で魔袋斗悲願の復帰戦があったとしてその挑戦者がゾウリムシ

だ。どっちが勝つと思う？そういうレベルの話だ」

そこまでいうか！？つか俺ゾウリムシかよ！

その言葉に俺はふて腐れたようにそっぽを向いて、残りのサンドイッチを口の中に放り込んでコーヒーで流し込んだ。

先輩は俺を見ながら何が面白いのやらニヤニヤ笑っていたが、ふつとため息を一つついて再び口を開いた。

「誇張でもなんでもない。本当にお前の間にはそれくらい差がある。納得したのであれば、お前が幻想郷へ行つて答えを見つけてんだな、案外八雲紫はこちらと幻想郷を繋ぐ外務官としての役割でお前の幻想郷入りを容認したのかもしれないな」

先輩は空のコーヒーの缶を弄びながら、今俺がもっとも心が動くであろう言葉を言い放った。

「それに、八意永琳のことがわすれられるのか？」

………忘れられる訳がない

その言葉は反則だ、卑怯だ、意地悪だ

先輩の一言でもう答えが決まってしまった。

たぶん、俺には面倒くさいことが巻き起こるのだろう。

幻想郷と俺たちの世界を繋ぐパイプとして俺は使われるのだろうか？  
それとも幻想郷宣伝の為のスピーカーとして俺は使われるのだろうか？

はたまたなんてことはない、ただの駒として俺は使われるのだろうか？

上等だ、やってやろうじゃないか。恐らくこのチャンスを逃したら次はない。

降りかかる火の粉を払いながらも俺は進んで行ってやる。

たとえ八意さんは誰かの影を俺と重ね合わせてたとしても、それでも構わない。

そもそも出会いとは、そんなものじゃないか？

昔初恋の人に似ていたから、とか。

趣味が俺と同じだっただけ、とか。

最初はその程度でいい、問題はその過程。

俺はやる、やってみせる。

彼女のそばに並び立つために、なんだってやってみせよう。

もう迷いは消えた。いこう、幻想郷に

先輩は俺の表情を見ながらにやりと笑った。

「ま、がんばんな」

「そついえば八意永琳は今何してるんだ？」

冷たくなった缶をゴミ箱に投げ込んで先輩は聞いてきた。

俺も続けてゴミ箱に向かって投げ込んで、外れた。

くそっ、と悪態をつきながらのろのろゴミ箱へ近づいて缶を拾い上げてその中にぶち込む。

「とりあえず目立たないようにしてくださいって釘さしてますので家に籠ってるかと思いますが」

俺の返答に先輩は一瞬言葉を詰まらせた。

不審に思っただけ振り返って即後悔した。その鋭い瞳が俺の刺し貫いてるからだ・・・な、なんなんだ！？

先輩は俺を視線から外さず、外の凍えるような空気にも負けないような声を上げた。

「家って、お前のか？ってことは、泊ったのか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・あ

一陣の風が屋上を撫ぜる。

俺が思わず身を震わせたのはその故だと信じたい。

ゆっくりと後ずさる俺に合わせるように先輩が歩みを進めていく。

「知ってるか？俺はな、13日の金曜日にジェイソンがくそつたれなカップル共に正義の鉄槌を下すシーンが大好きなんだ」

「ちょ、ちょちょっと待ってください！八意さんとはそんな関係じゃないですって！そもそも八意さんは俺の影を追って・・・・・・・・」

俺の引きつった声に先輩は意を解さず、すばやく踏み込んで俺の頭を鷲掴みにした・・・・いてえ！！

「能書きは垂れたか？じゃあクタバレ」

「あ、あががああああががあああああああ！！！！！！！！！！

！！！！」

刑部先輩26歳

スペック：S+

今まで付き合った彼女：2人

付き合った期間最長：3ヶ月

振られた理由：なんでいつも怒ってるの？ 怒ってない

モテない理由：目つき・よく不良に絡まれるから

仕事帰り、家へと歩みを進める中、俺は思考の底を漂っていた。  
なんせ幻想郷へ行くという決心はついたものの、やるべきことは山  
積みだ。

まず会社は、まあ退職しなきゃ駄目だよな？

この時期このご時勢に退職か、いてえなあ・・・

ガリガリと頭をかいて今やらなきゃならない身の回りの整理に頭を  
悩ませる。

とりあえず後五日間で全てのことには決着をつけなければならない。  
まず

- ・会社の退職願
- ・アパートの明け渡し
- ・親に事情説明

これは確定だ。

会社の退職は色々引き継ぎとかあるし、つーか聖夜前のこの時期だし。

もしかしたら聖夜までは仕事はしないといけないかもなあ。とりあえず辞職届は書いといて、次はアパートの明け渡し。

不動産屋に解約の連絡して手続き。

その後に荷物を出して、冷蔵庫とか洗濯機とかどうしよう。処分しようと思ったら以外に金かかるからな。

最後は親だな。

ま、俺の家は放任主義だからそれほど強くは言われまい。

むしろ女性のために全てをなげうった言ったら、逆に喜ばれそうだ。変態だからなあ俺の家は。

後は貯金全てを家に渡したらいいだろう。

後はそうだな、幻想郷に何を持っていこうかな？

電気通ってるのか？

電波は？水道は？

うーんネットで調べたいところだけど、八意さんが許してくれるかな。

そこで思考の渦から身をあげた。

いい香りがする。今日はなんだろう？これは恐らく・・・ビーフス  
トロガノフ！だと思っ！

いいねえいいねえ最高だね！

俺は期待で膨張した心を胸に家の扉を空けた。



## 6話 いこう、幻想郷へ（後書き）

俺キモス

そういえば最近気付いたけど感想もらったくらいではptt上がらないですね

素晴らしい！素晴らしい！これは本当に素晴らしい！

これで心置きなく「感想くれ！」って言えmas・・・

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ(前書き)

年内には幻想入りしたい

つーか二週続けて先輩話にするところだった

あとで読み直して(誰得?)とか思わなかったらえーりんまた出な  
かったは

慌てて消した、そしたらこんな時間かかった、サマソ

## 7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ

深呼吸を一つ、気合を入れて覚悟をきめる。

これを提出したら後戻りは出来ない、全ては一からのスタートとなる。

それでいい、しがらみを残して前に進めるか？

「主任、すみません。お話があります」

頃合やよし。さて、奇妙で不思議な一步を踏み出そうか。

俺の声に検案していた書類から目を離し、主任が俺を珍しいといった表情で迎えた。

あまり主任とは接点がないため、こう話す機会はあまりない。そしてこれが最初で最後になるかもしれない。

「これを・・・」

俺は黙って一つの封筒『辞表届』を提出した。

本日の昼休み、再び俺と先輩は屋上でコーヒー片手にたむろしている。

話す内容は主に業務の引継ぎだ、俺が出した退職希望は25日聖夜である。ぶつちやけ一番忙しい。

辞表を提出した後が一番大変だった、主任は俺が突然退職するといつて『やることやってからやめる!』の一点張り。

しかたない、いきなり辞表届けを出す俺が悪い。本来なら1ヶ月前くらいに出すもんだが、俺はたった4日間で辞職したいですといったのだから。

あまり周りに迷惑は掛けたくなかっただけに心苦しいが、もう期限が迫っている。八意さんももう少しゆとりをもってきて欲しかったな。

さて、後は同僚の上野にも頼んどこう。今の彼の状態はちと心配だが、我慢してもらおう。

後去り際に彼に言っておかなくてはならんな

「八意さんは俺が奪う!」

つてな

昨晩はやる気持ちを抑え帰宅した俺に、八意さんが最初にかけてくれた言葉は、

「さいかち 槐、後もう少しで出来るから、先にお風呂でもはいつてなさい」

・・・思わず結婚しているのではないだろうかと錯覚してしまいうなシュチュエーションだ。

俺は軽く生返事で返して、洗面所付近で服を脱ぐ。

昨日から思っていたが八意さんは風呂どうしているんだろうか？

俺が仕事に行っている間に入っているとか・・・なかなかいいな。

い、いつもシャワーだったけど、今度浴槽にお湯でも入れて・・・

ゴン

そこで俺は頭を風呂場の扉に打ち付けて馬鹿な思考に緊急停止を命じた。

もうだめだ、脳内が意味不明なデッドヒートを繰り返している。主に理性と欲望の。

苦しい、狂おしい・・・溢れる。私の中から探究心という名の欲望が。

とりあえず、八意さん使用後湯船大作戦は保留にしよう。

だめだ、どんどん俺が駄目になっていくのが分かる。

だがしかし！八意さんが風呂に入っているのを想像してみろ！シャワーでもいいぞ！

.....

どうだ？

想像できたか？

な、なにかくるものないか？

八意さんの入浴中にのび太よろしく入るんだ。

でも彼女はシャワーの音で俺が入ってきたことには気付かない。

シャワーから流れる湯が彼女のスラリとした首筋を通ぬけ、豊満ではじける様な胸へと移り、それに反比例するようなくびれ、引き締まった腰へと流れ、極上の果実のように熟れたお尻のラインを通り抜け、ふつくらとした太ももへと落ちていく。

しっとり濡れた前髪の滴り落ちる雫から覗かせる彼女の瞳は、ぬくもりに熱うかされ妖しく潤んでいて、ゾクリとするほど扇情的だ。彼女の全てが俺の急所を穿っている。白い靄が俺の視界を覆う、それはただ湯気だけのせいではなく、理性すら暴走している。

俺はふらふらとシャワーを浴びている彼女の柔肌をゆっくりと抱きしめる。

その時彼女は初めて俺の存在に気付き頬を上気させて「はぁ・・・」と吐息を洩らした。

彼女の肌は赤子のように瑞々しく潤っていて、羽毛のように柔らかで、理性を溶かす熱をもっていて・・・

「うわああああああああああ！！！！！！！！！！何で俺はこんなに阿呆なんだあああ！！！！」

再び風呂場の扉を殴打する音が、夜の闇に響き渡った。

「「いただきます」」

ズキズキと痛む頭を我慢しつつ、両手を合わせた。

本日の夕食はビーフストロガノフ、みたいなものとサラダだった。うん、確かに『みたいなもの』は失礼のような気もするが、なんせこのストロガノフ、色が緑なんだ。

思わず「何、これ？」と質問しそうになったが、正直今八意さんを正面から見る事が出来ない。もうどうしようもなく後悔している。妄想の中とはいえ八意さんに劣情を抱いてしまった。これがゲームや漫画のキャラクター話なら、悟った表情をして「何してるんだろう・・・俺」と呟けばいい。

が、しかしこれは現実、これが現実。

劣情を抱いた相手が目の前に居るわけで、しかもそれがゲームや漫画の登場人物で、さらには俺に飯まで作ってくれる。なんか、申し訳ない。

俺に出来ることっていったらこの緑色のストロガノフを美味しく頂

くことだ。

えー、とりあえずサラダのドレッシングドレッシング・・・

「シーザーでいいかしら」

「あ、はい。それでいいです」

最近彼女の先読みスキルも慣れてきた。

気が利くってレベルではなく心を読んでいると思えなくもないくらい、俺の行動パターンを把握している。  
なんだろう、勘がいいのだろうか？

とりあえず俺はこの緑色の物体をスプーンですくい上げた。

すごくいい匂いがするのだが、この色はどうにも出来なかったのだろうか。

ちよつとばかり躊躇したがぱくりと口に含んだ。

その刹那突如として口内で行われる味の七重奏セブレットの管弦楽団オーケストラに俺は愕然とした。

これほどうまいものがこの世に存在したのか・・・

昨日の和食も美味かった、だが俺はこつちの方が美味く感じる。

この濃厚な味わい、しかし後味は吹き抜ける草原のように涼やかだった。

猛然と食べ始めた俺を八意さんは苦笑を一つ洩らして、自らのスプーンを動かし始めた。

「八意さんお話があります」

後片付けを相変わらずの謎の技術3分程度ですませ、居間に来た八意さんを俺は正座で迎えた。

彼女も俺の態度を察したのか方眉を軽く動かし、俺に倣って正座する。

大きく息を吸い込み氣力を充実させ、風船の様に膨れ上がったそれを弾き飛ばす勢いで声を上げた。

「決心ができました。俺は八意さんと一緒に幻想郷に行きたいと思  
います」

俺の言葉に八意さんは目を細めて薄く微笑んだ。

「そう、決心がついたのね。分かっていると思うけど、幻想郷はこの地と異なる秩序で成り立っているわ。あなたはそれを受け入れられるかしら？」

「そのつもりです」

彼女の目を離さずに答える。俺は今もつ全てのしがらみを彼女のために犠牲にする。

家も家族も会社も友人も、彼女の傍に立つためにはそれらを全て置

き去りにしなければならぬ。

構わないとも。

俺は八意永琳という人物を一目みたあの時、価値観が音を立てて崩れ落ちるのを聞いた。

彼女に不釣合いと感じながらも恋をした。

見惚れ、心酔し、憧憬した。

全てを白昼夢にして忘れ去ろうとした。

しかし俺は願った。

叶うのなら、叶うのなら、俺の声を拾い上げ叶える何かがあるのなら、もう一度……。

そして彼女はきた。

ここまでお膳立てされたんだ。

行くしかないよな？男が廃るか？もう二度目はないぞ？

「俺を、幻想郷へ行かせてください」

悩みに悩み、理念を擦じり、心を砕いた。

その結果に出た答えだ、もう悔いはない。

俺の目を離すことなく見ていた八意さんは、このとき間違いなく『俺だけ』を見詰っていた。

「いいわ、あなたを幻想郷へ導きましょう。この地への清算は済ませておきなさい」

「はい、明日にでも会社に辞表でもだそうかと思えます」

「わかったわ、それじゃ・・・私はこの部屋で食べる最後の料理を作るとするわ」

楽しみにしてなさい。そう言って悪戯っぽくクスリと笑った。

「そうか、八意永琳には話したか」

例のごとくコーヒーを手の中で転がしながら先輩は言った。

「ええ、仕事終わったら親に話してアパート解約して終了です」

「俺もいけないよな？」

「無理ですね、八意さんにも聞いたんですけど俺だけだそうですね」

先輩は残念そうに「そうか」とため息とともに吐き出した後、コーヒーを一気に飲みきってゴミ箱に投擲した。

「ちょっと早いが降りるか、お前やること山積みなんだろう？」

おっとそうだった、俺が抜ける引継ぎがそれこそ星数ほどある。

得意先の対応とかも上野に話しておかねば。俺は先輩にならないコーヒー缶をゴミ箱に捨てて先輩の後を追った。

しかし時期が時期だけに本当にやることが多い。

通常勤務と平行して引継ぎを行わなければならないからな、今日は残業か。

八意さんの料理が待ち遠しいが、仕方ない。

ここで下手にサボったら俺の我欲のために、周りしわ寄せがいく。さて、後四日間どう問題を処理していくかな・・・

そのとき仕事場には不釣合いな騒ぎが聞こえてきた。

得意先からの電話もする仕事場で騒ぐとは言語道断で、先輩はそんな喧騒が大っ嫌いだった。

案の定、先輩は苦虫をつぶした表情をしながら仕事場へと入っていた。

恐らく中で待ち受けているのは先輩の凶器的な視線と威圧感、そし

て一喝。

俺はこのことには関与してないから全然構わないんだけど、今中に入る気は流石にない。

ほとぼりが収まるまで通路で待っとくか、しかしまたピリピリとした雰囲気の仕事かぁ。

肩が一段階下がる、ため息一つつきたい気分だ。

・

・

・

あれ？おかしい、喧騒が収まらない。

何故だ？先輩相手だぞ、主任だってその気になれば言うこと聞くのに。

不信に思った。

だってそうだろう？

今の今まで先輩の威圧感にやられていた皆が、今日に限って聞かないなんて理由ちよつと想像つかない。

おれは不信感を大に、それとほんのちよっぴりの好奇心を胸に、仕事場の中へと入っていった。

『ここです！このアパートに八意永琳らしき人物が入っていきました！』

テレビに映ったアナウンスの視線の先にはモザイクのかかったアパートが映し出されている。

俺は分かる、なんせ2年は見てきたのだ。間違いなく俺の住んでいるアパートだ。

『今日11時30分ごろ、市 のスーパーマーケットでお昼の食材を求めにきた主婦の中に東方Projectの登場人物、八意永琳と思わしき人物が徒歩で買い物に来ていたところを、張り込んでいたカメラマンが見つめました。八意永琳は買い物を終え、今度も空中を浮遊せず徒歩で帰ってりそしてこのアパートに入ってしまったということです。では近隣住民の声を聞いてみましょう、現場の井本さん？』

ぶっん

いい音して思考がシャッターを閉めた。本日の営業は終了しました。

「俺、今から スーパー行ってくる！」

「おい！後15分で昼休み終わるぞ！」

「構うものかあ！俺はえーりんと！添い遂げる！」

え？何これ？

えつと確かに、ええ？

八意さん？目立つ行動はつていませんでしたっけ？

茫然自失、その言葉が今の俺に一番あうのだろう。

まさしく俺は何も考えることができず白い灰となっていた。  
しかしその俺に色をつけたのは、

「……………おい、なんかこれ。槐さいかちのアパートじゃね？」

隣に居る上野の野郎の台詞だった。

上野の言葉に聞いていた周囲の喧騒が唐突と消えた。

上野は俺のアパートに遊びに来たことがある。

確かにアパートにはモザイクはかかっているが、周囲の風景は鮮明に映し出されている。

『……………』

数十の目がこの俺に向けている。

探るような視線で、それでいて確信めいた表情で。

この日この時、俺が退社宣言をしたと同時の事態進行、疑うべき行動は端から端まで。

何をすればいいか？

要領のいい人間ならここですぐさまおどけて見せるか、上手い言い訳を考え付くのだろう。

しかし、俺は霊力を持っている以外は順当に凡人だった。

いままでそれに不満に思った事はない。周りと似ているということ以一种の安心感すら感じていた。

だが、今それを呪う。

「……………先輩……………引継ぎを、お任せします……………だあああ—————!!!」

何も考え付かなかった。

だから俺は唯一できることをした。

すなわち……………!

「ああ！<sup>さいかち</sup>槐逃げやがった!!!」

「殺す！あいつは殺さなければならぬ!!!」

「<sup>さいかち</sup>槐いいいい!!!!!!」

そう、逃走という選択肢以外、浮かばなかった。

「うそだあああ！！！何故だあああ！！！！八意さああああ！！！！」

「てめえ東方もろくにしらねえ癖にえーりんのこと喋んじゃねえええ！！！！」

「待て！そして死ね！！！！」

走る、走りぬけ、駆け抜ける。

階段を駆け下り、ロビーへ

受付嬢に駆け抜けざまに謝って、玄関口へ

このときばかりはまどろっこしく思える自動ドアを抜け出し、外へ

背後から迫る怒声と駆け音は意識外へ

「タクシー！ちょっと待てえ！！！！」

通り過ぎるタクシーを思わず飛び出た金切り声で呼び止め、転がるように入り込む。

「市　　まで！」

行き先を聞いた運転手は何か悟ったような笑みを浮かべて

「ああ、よくいるんですよね最近。なんでも女が空飛んで立って言う……」

「いいから早く出てください！」

思わず叫んでしまった俺の声に運転手は慌てて扉を閉め、迫ってくる全ての喧騒を置き去りにして走っていった。

会社の中は騒然としている。

皆口々に槐さいかちに関する情報を共有しようと躍起だ。

俺はタバコを探るように胸元に手を伸ばし、いつもの定位置にガムしかないことに気づき、顔をしかめた。

「刑部くん、君は槐さいかちがあの飛行少女と関係しているってしっていたのか？」

主任がおどおどと道に迷った少年のような態度で俺に聞いてきた。  
さて、どうするか……

「さあ？しりませんね、それより今出て行った阿呆どもをどうしますか？槐さいかちはやめるとして他の上野、笹原、藤岡は仕事の時間になっても戻ってきませんか？」

「え？ああ、そうだね」

「魔法だかなんだか知りませんが、それで仕事をサボっていい理由にはならないでしょう。それなりのペナルティが必要だと思っのですが」

「そう、だね。うんまあ総務部の連中と話してみるよ」

そそくさと逃げ出す主任を目の端で確認しつつ、右手で唇をなぞる。

ああ、しかしあいつとの最後の言葉が「引継ぎお願いします」とは、全く舐めた後輩だ。たぶん二度、会えるかどうかになるだろう。大きく一つため息を吐いた。

「早苗さんに、会いたかったなあ」

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ(後書き)

モチベ維持が一番大変だは

後PV一万ありがたや  
これで

初心者 初級者

にジョブチェンジできました  
読者の皆さん、愛してるとは言いません  
ただ、好きだ！  
だから評価はらめー本当にptがはっ！

8話 えーりん！えーりん！助けてえーりん！（前書き）

えーりん脳ですいません

だいが書き直しました

以前の出来損ないを見てしまった人に盛大に謝罪を  
やっぱあれだね、眠気と肩組んでの共同作業はだめだね

## 8話 エーりん！エーりん！助けてえーりん！

目的地に近づくとつれタクシーの進行速度が徐々に緩やかになっていく。

それもそのはず、車道歩道問わず彼らの向かう先はまるで一緒に、皆獲物に群がる獣のように進む。それは彼らそのものが一つの生き物のように感じた。

もっとも俺もその一人であることを否定するのは少しばかり難しいのだが。

今の気分は最低だ。

俺の目的地に思いを馳せ、憂鬱な表情で外に視線を投げかける。

・・・どう考えてもこれ無理だろ。

到着するのにまだ距離はあるはずなのに、日本三大祭りのごとく人の数。日本に1億2千万人いるといわれているが、ちょっと納得できる人ごみだ。

それに車の数も尋常じゃない、さつきからこのタクシー、まさしく亀の歩くスピードでしか進んでない。

というか実質止まっている。おいみんな、信号青だぞ？何故進まん。

シートに深く沈みこみ諦めにも似た心境でため息を吐き出した。

ここにいる人はみな八意さんを求めては居ないだろう。彼らはその先にある魔法という名の非常識を求めているのだ。

今の日本の低迷は著しい、もっとも顕著に現れているのは自殺者の数だろう。

希望がないのだ、出口の見えない袋小路、閉塞的な経済の疲弊に喘いでいる。

弱者救済がこれほど促進している国は他にないはずなのに、道行く

人々を見れば希望なく下を向いて歩いている。  
ニユースは常に汚職と不祥事の連続、迷走する政界に弱体化する対  
外交渉。

人々は明るいニユースに飢えていた。

人々は刹那的でも今の現状を忘れたかった。

人々は現状を取り巻く環境に新しい風が欲しかった。

結果これだ。

オイルショックに似た現象が今の日本を包んでいる。

当時の人間はトイレットペーパー求め、現代の人間は魔法を求める。  
まさしくこの時期しか起き得ない絶好の機会というしかない。

俺は再度ため息を洩らし、動く気配のない前方の車列を眺めた。

「すみません、もうここで降りしてください」

これ以上粘っても意味がない気がする。

少し癢だが、今歩道を歩いている眼鏡かけた小太り集団の中に紛れ  
よう。俺は運転手に運賃を渡し、底冷えする外気に体を晒した。

『えーりん！えーりん！助けてえーりん！えーりん！えーりん！えーりん！助  
けてえーりん！』

「・・・・・・・・・・」

ム力つくぐらい子気味いい音頭を取りながら腕を振り進む小太り集団。俺は思わず呆然と眺め、思い返して後ろを振り向くと既にタクシーはUターンを終え、遠くに過ぎ去っていた。悟った表情でまた阿呆な集団に目を向けて、口元の端をひくつかせる。

頑張れ俺

(えーりん！えーりん！助けてえーりん！)

頭の中でその音頭がぐるぐる回っている。少し分かった、集団催眠ってこういう風になるんだ。

重く痛む頭を抱えながら、視線を上げて本日最高のため息を漏らした。

人

だいたい人  
たまに車（アンテナ付）  
ときおりフラッシュ

その情景が目指していた目的地を取り囲んでいた。

すごい人ばかりしてるだろ？これ、俺のアパートなんだぜ・・・

携帯を開けて不在着信二桁を軽く無視し、ニュースを開ける。

・・・まだ、八意さんとのコンタクトは取れてないみたいだ。  
ふう、と軽く安堵のため息をついた。

現状維持か、とりあえずは最低限に最高だ。

しかしさて、どう動くか。

まあここはベターにこのアパートの住人になりすまして突入が安定  
だな。しかしこれ入れるのか？

「おいえーりんどどこにいんだよ、見せる！」

「フーかマジ空飛んでたのか？」

「お前ら邪魔だあ！俺の嫁を迎えにいけねえだろーがあ！」

「うぜーぞ死ね！」

「ZUN来んの？」

「じねーだろjk」

頭をガシガシと少し乱暴にかき乱した後、覚悟を決める。

「くそっ、すいません通してください！」

すこし目立つが仕方あるまい、さっさと八意さんに物申したい。俺は人垣を掻き分けて、ゆっくりと着実にアパートへ近づいた。

アパート前には案の定テレビ関係者と思わしき人物が壁を作っている。構うものか突っ切れ。

「そこのあんた、今関係者以外立ち入りだよ」

やはり呼び止められた。

くそ、関係者って少なくとも仕切ってるあんたらが一番関係ないだろ！

舌打ちしたいのを堪え、口を開く。

「……このアパートの住人なんで」

「住人？何号室の誰？」

「309号室坂口です」

「ええつと・・・あ、はい確認取れました。どうぞ」

「・・・ッ」

すまん、坂口さん無断で名前語った。

つかこいつらなんでアパートの名簿持ってんだよ！

今度は間違いなく舌打ちをしてアパートの中に入って階段を上る。

・・・半分予想はついてる、この階段を上へと続くケーブル見れば嫌でも。

そして悪い予感の外れようもなく、俺の部屋に軽く8人ほど集っている。

もう完璧にばれてらー、もう阿呆かと。

冷めた視線で見つめる俺の姿に気付いたのか、数名が俺に駆けつけてくる。

「すみません、303号室の槐さいかちさんでいらっしやいますか？」

「ちがいます、あと邪魔です奥に通してください」

「お話を・・・」

「通してください」

突き放すように話す俺に記者達は意表をつかれた様な表情を浮かべた後、慌てて俺に道を譲った。

・・・チャンスは一度のみ、これに失敗したら？考えることを放棄する！

正直賭け以外なんでもないがこれしか俺の部屋に突入する案が浮かばなかった。

頼む！八意さん！

端によった記者を煩わしそうに進み、件の303号室を通り抜けようとした刹那

俺はそのドアノブに素早く手を伸ばした。

突然の行動に周りの空気が一度死んだ。

それらを全て置き去りにして部屋に飛び込む俺に、その時初めて怒声が生まれる。

その喧騒を扉を閉じることでかき消し、後ろ手で鍵をかけた。

玄関の八意さんの靴を漫然とした表情で眺めた後、我に返る。

やった？成功し、た？

鍵が開いてるか否か五分だけただけに安堵の吐息と冷や汗が同時に

でた。

うおー！やったぞおお！

思わずガツポーズしている俺に外の連中が

「あの野郎やりやがった」

「警察だ！警察呼べ」

くそ忌々しい！

「俺はこの部屋の持ち主の槐さいかち隆治りゅうじだ！」

俺は壁越しに叫び、ガンガン扉を叩いている間抜けを無視して部屋へと歩みを進め、少々乱暴に扉を開けた。

八意さんそこにいるんですよね・・・！

果たして、八意さんがお茶を嗜みながら吉川某の三国志の読書に励んでいた。

外の騒然とした空気と全く逆、思わず草原で日向ぼっこしているよ  
うなゆったりとした時間の流れに、俺は思わず毒気を抜かれしまっ

た。

「早かったわね、もうすこし遅くなるかと思ったけど」

呆けた俺に八意さんは絹のようにスラリとした微笑を浮かべた。  
今度は別の意味で惚けた、ってそうじゃないだろ俺！

「八意さん！目立たないでくださいって言ったじゃないですか！何  
であんな・・・あんなことしたんですか！」

少し強い口調で問い詰める俺に八意さんはさらりと笑みを深くして  
受け流した。

「目立つ行動はとっていないわ。だって歩いて買出しに行ったんで  
すもの」

「い、いや確かにそうなんですが・・・」

うん、間違っちゃいない。

八意さんは前回ののように霊力による浮遊はしていない、全うに常識  
の範囲内の行動だ。

それは俺も認めよう、けどね・・・

「なんで着替えなかつたんですかああ！！！！」

その赤青ドレスは現代社会においてあらゆる視点から見て浮いてる  
だろおお！！！！

「そうは言っても、外の世界の服はちよつと野暮つたくて・・・」

「や、野暮つて・・・」

なんだ？地球人とムーレイスには格差的な美的センスがあるのだから  
うか？ユニバーズ！

がくりと膝を折り両手を床につけ体を支えた。  
もうだめだ、話が、かみ合わない。

二人の間に暫しの沈黙が流れる。  
聞こえる音といたら湯沸し機のポットが時折放つ加熱音くらいだ  
った。

話は変わるけどこの音を聞くと冬の到来を感じさせてくれ？

・・・・・・・・・・・・・・・・？

窓の外をちらりと見る。

あれほどの人だからだ。さらに言つと家主の俺が帰ってきたのにも  
かわらず、外の喧騒が全く聞こえない

「騒がしいから簡易結界張っているわ。本を読むにはあの喧騒は、あまり優雅ではないでしょう?」

・・・そうですか、もうなんでもありですね。  
不意に俺が一人相撲をとってる気分になってきた。

いや八意さんから見れば間違いないとってるだろう。  
相変わらず彼女が俺を見る表情は、犬をからかった時どろろという反応を示すか楽しくてしょうがないみたいいな表情だ。  
ああ、もうこのまま床に倒れこみたい。今までの俺の心労はなんだったんだろ?」

「槐さいかち、そういえばお昼は食べたのかしら?」

・・・そりゃ、凄まじくすいている。  
引継ぎで忙しかったからカロリーメイトと缶コーヒーで済ました。  
顔を上げると小さな子供を見届ける母親のような自愛に満ちた笑みを浮かべている。

「・・・・・・食べてないです」

「そう、じゃあすぐに用意するわね」

八意さんはそういつて台所に向かっていった。

……負けた、もう負けでいい。

そうさ、恋なんて惚れたほうが負けなのさ。

結局その日は、我が牙城で過ごす最後の時間を八意さんとゆったり過ごした。

テレビで見る俺のアパートの外の喧騒を、リアルタイムで見れるとはなかなか感傷深い、テレビで流れる怒声を完璧にシャットアウトする結界ってすごいね。何でもありだね。

「結界術式は得意よ。深い昔が懐かしいわね、また術式戦でもやってみたいわ」

術式戦ってなにそれ怖い。

八意さんって血気盛んなんですか？

「さあ？昔はどうか知らないけど、今はそんなことはないわよ？」

何ゆえ疑問系？

「ふふ、私も負けず嫌いだったってことよ」

俺も結構負けず嫌いですよ。

不甲斐ない自分に腹たつてもっと！さらに！とか思っちゃいます。

我ながら単純だなあ、とか思いつつ前のめりな会話をする俺に八意さんは相変わらず慈愛の笑みを浮かべていた。

翌日の朝、なのだがスズメの鳴き声がしないとは、ちょっと記憶がない。

俺のアパートの近くに木が立っているせいで、朝はスズメが目覚まし替わりになるくらいうるさいのに、これも結界の効果か。

うーん今日が12月23日だから・・・後2日か。  
そう、<sup>クリスマス</sup>聖夜に幻想入りする計算になる。

今日でこの家とおさらばする予定だ。現在の時刻は7時過ぎあたり、人が本格的に動き出すにはまだ少し早い時間だろう。カーテンをずらして外は覗くと、嫌な曇天の下にまばらとは言え今だ十数人の人間が俺のアパートを取り囲んでいる。人はこれでも減ったはずだが、まだまだ予断は許されない。さあて、どうやってあの連中を撒こうかね？

「槐さいかち、どうしてもこれじゃなきゃ駄目かしら？」

扉越しに聞こえる八意さんの声に、俺は外への関心をそっくりそのまま彼女に向けた。

彼女の衣装は少しばかり目立ちすぎる。特に相手を撒こうとしてるあの格好は自分がここに居ることを宣伝しているようなものだ。よって八意さんには俺の持っている男女兼用にも見えなくもない服を提供しているのだが、八意さんは少々渋った。

なんかセンスがないらしい。ほつといて下さい！

「駄目です。郷に入れば郷に従え、ここでは八意さんの衣装は目立ちますので隠れながら進むのはちょっと難しいです」

「はあ、しかたないわね」

そういつて彼女は扉を開けた。

………なんてことをしてくれたんだ、俺。

そんな、こんな……

俺の渡したジーンズは彼女の流れるような足のラインを浮き立たせ、特にお尻の円熟さは饒舌するに難しい。

赤のジャケットから覗かせる黒のセーターに隠されたたわわに熟れた果実は扇情的すらある。

そして何より彼女の少しばかり紅潮した頬とふくよかな唇、存在感を際立たせる白銀の髪に、憂いを帯びた瞳。

完璧だった。

この世に完璧なものなんてないって言った奴はこれを見たらすぐさま改心するだろう。

う、静まれ俺の両腕！

確かに今の八意さんをこの手で覆いたいのはよく分かる！

ブルブル震えて何も言えない俺に八意さんは不安げな表情を浮かべた。

「やっぱり似合っていないわよね」

がしつと彼女の両手を握り締めて八意さんの顔を正面から覗き込んだ。

普段なら長時間見れず照れてしまう俺でも、この時はかりはそんなこと考えてられなかった。

「八意さん、ありがとうございます」

………俺は、何を言ってるんだ

自分でも何を言ってるのか理解できなかった。  
頭がぐちゃぐちゃに攪拌されて、今この現状すら頭の中から消え去っていた。

そして彼女も俺が何言ってるか、わからないはずなのに

「ええ、どういたしまして槐さいかち」

彼女の微笑みに俺は救われた。

くはっ

さて、どうやってこの隔絶された空間から抜け出そうか。

生憎俺のアパートは突然建物が潰れたとしても「あれ？ここなにかあつたっけ？」と思われるくらい、全うに普通のアパートである。

そんな普通のアパートに凝ったギミックを期待するだけ無駄であり、それでも探そうとする奴はただの現実逃避野郎だ。

正当法で行くしかないだろう。

重要なのは連中が俺と八意さんから意識を離すことが必要だ。

うーん、どうしよう。

外の連中に仲間を紛れさせて陽動作戦、か。

いや、難しいな。そもそも俺に協力してくれる人間なんているか？俺の立場が逆に協力してくれと言われたら？

- 1 . 陽動に協力するが、何かしらの利を要求
- 2 . 報道陣に密告して、陽動されたフリをして俺たちを確保
- 3 . そもそも断る

ま、大筋はこんなもんだらう。

協力してくれたと仮定しても、相手にもよるがほぼ間違いない八意

さんとの接触及び霊力の有無又は保持の要求、こんなところか。後者二つは許せるが前者は許せん、なんとなく。

先輩ならワンチャンあるが、先輩には仕事の引継ぎを押し付けてしまったし、これ以上甘えるのはよくないし・・・

「何を考えてるの？」

悩んでいる俺に八意さんはひょいっと俺の顔を覗き込んだ。

ぐう、仰け反りそうになるのをかるうじで抑え、八意さんの質問に答えた。

「いや、ここからどうやって上手く相手を撒けばいいか考えているんです」

その俺の答えに瞳を数回しばかたせたと思ったたら今度はくすくすと笑い始めた。

「な、なんですか」

「いえ、なんて単純なことで悩んでるのか、と思ってね」

単純と申したか。

間違いではないが釈然としないぞ。

「じゃあ八意さんはもう既に解決策がある、と?」

「ええ、もちろん相手を撒けばいいのでしょう?」

いや、そうなんだけどそれが出来れば苦労はしない。

とにかくこちらの悪条件が多すぎるのだ。地理的にも人員的にも。

しかしそう考える俺を全く意に介さず自信に溢れた笑みを浮かべる八意さんを見ると、本当になにか考え付いたのだと思わされた。

ちよっと悔しい。昨日から俺がずっと考えたことをものの数秒で思いついた八意さんがなんとも恨めしい。

「けどこの部屋は3階ですし立地条件的にも不利です。それに恐らくですがこのアパート全体、間違いなく見張られています。安易な陽動作戦は相手の思う壺ですよ」

何を言っているんだ、子供じゃないんだから。

しかしやっぱり、悔しい。俺は彼女と並び立ちたかった、だがあの笑みを見るとどうしようもないほどの差を見せ付けられたようで。

そんな負け惜しみ似た俺の発言を、八意さんは案の定一蹴した。

「着眼点はいいけど、それだけじゃまだまだね」

彼女は凜々しい笑みを投げかけ、カーテンの締め切った窓へと歩み

を進めた。

あそこは大通りを一望できる唯一の窓だ。逆に言うと大通りから俺の部屋の状況を視認しようと思うのなら、この窓の存在を最有力候補として監視する必要がある。

そんな人がもつとも注目しているであろう部位を八意さんは全く意に介さず、まるで早朝起きたとき、今日の天気を確認するような気軽な動作でその窓を開け放った。

その瞬間新鮮な外の空気と冷氣と共に、外のざわめきがこの部屋に怒涛のように流れ込んできた。

「永、琳？……永琳だ！八意永琳があ窓に！」

「え？でも服違うくね？」

「着替えたんだろ、きつとさ！なんだ？何をする気だ？」

「えーりー……ん！！！！俺だあああ！！！！！」

「お前誰だよ」

瞬くカメラのフラッシュと湧き上がる歓声。

一体彼女は何をする気なのだろうか？いんちき臭い説得か、もしくは靈力による結界的な何かを作るつもりなのか？

八意さんの動向に俺は意識を集中させた。

前者を採用するのなら催眠のような術式を用いなければ彼らを退散させることは難しいだろう。

彼らは今残っている彼らは知的好奇心だけではない、仕事という使命感をも燃やして挑んできている。  
倫理に訴える説得など彼らの心を動かすには足りない。

だがそれが可能ならばもつとも穏便に済ませられる行動かと思われる。

もちろん催眠の術式を見られないことが前提、かつこちらを映す力メラにも効果があるのかも加味しなければ事象だろう。

ならば後者は、音を隔絶する結界を作ることが出来た彼女ならば、俺たちの存在を隠匿する結界なんてのも可能ではないだろうか？  
もちろんこれは推測にすぎないが、霊力とか魔力の術式工程を知らない俺としては想像することが精一杯なのだ。

しかし彼女は俺の予想、そして外から溢れる喧騒その全てに背を向け、俺に手を差し伸べた。

まさしく予想外。

俺の予想を尽く外し、覆し、突然の行動に俺は馬鹿みたいに口を半開きにしてしまっていた。

そんな醜態を晒しながら俺はふらふらと花蜜に誘われる蜂の様に、なんの疑問浮かんでこないまま彼女の手を握り返した。

そして痛感するその読み全てを外した先に待っていた彼女の思案を。

その身に襲い掛かる強烈な違和感によって

皆、空に一度は大望を抱いたことはないだろうか？

俺はある、もし霊力とか魔力とかが一般化したのなら何がしてみたい？と問われるなら、俺は・・・

突然襲い掛かる無重力にも似た浮遊感

顔を圧迫する早朝の冷たい空気

足元から聞こえる多くの声の大瀑布

そう・・・まさしく、俺は空を・・・



・・・なんて乱暴な選択肢だろう。考えていた全ての観点をぶっ壊して彼女は飛ぶ。  
彼女の軽率な行動に、苛立ちさえ覚えた。

しかしそれ以上に、俺は自由に飛行していることに心を躍らせていた。

空への渴望、男なら一度なら夢を見たんじゃないだろうか？

ライト兄弟然り、オーガスタス然り、オクターヴ然り。

空を鳥のように自由に飛べたらどれだけ素敵だろうか。

人はそれを夢見て飛行機を作った、しかし今の現代ではそれですら満足できない。

本当に、自由に、体全体で風を感じたいと思ったのではないだろうか？

故に人は空想した。ありえない空想科学を信じたいと願ったのだ。

しかしそんなことある訳ない、空想夢想夢幻だと納得し、心の中で渴望していた。

それが、今この場で起きているのだ。

「・・・八意さん、俺も幻想郷へ行ったら空を飛ぶことって出

来ますか？」

八意さんはこちらに視線を向けることなく返答を返した。

「難しいわね、靈力の絶対量の少ないあなたが空を飛ぶのは、相当辛い鍛錬が必要よ。耐えられるかしら？」

脅しにも似た言葉だったが、俺は不安より先に歓喜が胸を埋め尽くす。

八意さんはこういつているのだ、頑張り次第で飛べるのだと。

頑張れば飛べるのだ。

比較したらよく分かる、普通は頑張ったって飛べないはずだ。

きっと今の俺の表情は欲しがっていたトランプットを買ってもらった少年のように輝いているのだろう。

そんな俺の表情をいつてかしらずか、八意さんは警告を促した。

「さあこの雲を抜ければ撮影機なんていう無粋な物から逃れられるわ。障壁を張るわ、離れないで」

雲に入る。

順当に考えるのならばまさしく愚考だ。

何の対策もしていないただの人間が強烈な気圧変化に耐え切れるはずはない。そんな常識を彼女と俺を包む膜によって明後日の方角へと弾かれた。

そう、よく考えてみたら空を飛んでいる事自体非常識じゃあないか。

雲を切り裂く、突き抜ける。

果たしてその先に

「あ……」

雲を地に、蒼天が映し出す太陽に、俺は心を打たれた。

その風景は一度は見たことがあった。

飛行機での光景、透明なガラス越しに見るその風景に俺は感嘆したものだった。

しかし、俺は再び、いやそれ以上に感動している。

風を肌で感じ、一秒と同じ形をとどめ様とはしない雲に胸を動かされ、蒼穹を映し出す燦然と輝く太陽に目を動かさざるおえなかった。

まさに天地に一つ、この光景は存在しないだろう。

「気に入ってもらえた様で幸いね」

その声到我を帰した。

日の出が映し出す彼女のほんの少しの得意げな横顔を見惚れること数秒。

再び自我を取り戻して足元に何もない不安定な感覚に、俺は思わず彼女の腕を抱き込んだ。

「うおお！！これ、なんで俺浮いてんの！？もしかして手を離したら落ちるとか！？」

「ええそうね。今あなたは私の術式に乗っかる形で浮いているわ。その接続点がこの手よ。せいぜい離さないことね」

「ま、マジですか。」

その言葉に抱き込んだ彼女の腕にさらに力を込めた。

雲の上っていうと標高1キロ以上あるだろ、そこからパラシュートなしのスカイダイビングっていったい何回人生振り返られるんだ。いや、それじゃない。

そんなことはいいんだ、いやよくないけど。

「ってそんなことより八意さん！何で大衆の面前で空飛んだんです

か！」

確かにあの連中は撒くことに成功した。

しかしこれで確定した、八意永琳は本物だと。そしてそれは幻想郷の肯定に他ならない。

そんな俺の焦りも空しく八意さんは澄ました顔で答えた。

「何故って、もう一度飛んでるのに隠す必要なんてあるのかしら？」

その答えに俺の疑点のパズルが嫌が応にも組みあがっていく。

先輩、あなたの推測はどうやらあっているようですよ。

彼女は間違いなく、幻想郷の管理者、八雲紫と繋がっている。

今の今まで彼女と一緒に居れば単純明快、算数の問題を解いている方が楽に思えるほど。

八意さんは恐ろしいまでに聡明だった。

その彼女が幻想郷の理を知らぬはずが、いやそもそもその理を教えしてくれたのは八意さんなのだ。その彼女が幻想郷の存在を明るみに出すだって？ありえない。

八雲紫によって締め出しを食らうかもしれない状況なのに、彼女はそれを一切気にしたそぶりは見せていない。

ならばもう答えは出ている、あまり考えたくなかった事実なだけに衝撃も大きい。八雲紫は、この状況を容認しているのしか思えない。八意さんが大きく世間の目に触れたのは、1度目も2度目もここぞとしか言えないタイミングだった。

しかし何故、何のために、その答えを見るには今だ見当たらないピ

ーが多すぎる。

俺たちの世界は八雲紫に、八意さんに振り回され、変化していく。俺は何も出来ずに、ただ流されるままだ。

本来ならば思い直した方がいいのか？

今だならまだ、まだ間に合う、引き返せる。

ああ、だが、なんてこった。ああ、くそっなんてキレイなんだ。

彼女の存在は、その全ての思惑を乗り越えてでも、俺は彼女の傍に立っていたかった。

8話 えーりん！えーりん！助けてえーりん！（後書き）

いやっほうー！！！！

問題が一つ解決したぜえ！

突然同僚に「ちょ、おま、何しろてるのwww」って言われずにすむ！

やったー！！！！

もう評価されてpt上がっても「うん、うれしいんだけどさあ・・・

」とかふざけた事考えなくていいんだ！

お気に入り登録してくださった皆様に、ありがとう！

評価されたら微妙な顔をするのに、してくださった方4名の方に愛してるう！

いや本当素直に感謝できるって素晴らしいですね

## 9話 おまけ以下の存在

「八意さん今からどこへ向かうつもりですか？」

ほんの少しばかり振るえる声で質問する。

警戒心を覗かせた俺の音質の変化を彼女は敏感に感じ取り、笑みを深くした。

「あなたの考えていることは大体分かるわ。私が八雲紫と組んで、幻想郷の為にあなたを管理者に引き渡すのではないか、かしらね。私は差し詰め彼女の指示通りに動く出来のいいお人形ってところかしらね」

そう彼女は俺の考えを看破し、ますます笑みを深くした。

「そうならあなた末路は？考えなくても分かる、幻想郷の歯車と一生振り回されるのが落ち。あなたの利用価値はその一点、外の世界のパイプとして、何より外の憎悪と妬みを一身に受け止めるだけのフィルター」

そうだろうさ。

八雲紫が幻想郷のためにこの騒動を起こしたというのなら、この騒動の中心である俺は一体何の為に必要か。

幻想郷は多くの失われた技術が存在する。特に人々が注目すべきところは霊力や魔力の加工だろう。

人が一度は思い描いた幻想がそこにあるのなら、皆はこぞってそこへとなだれ込む。

しかし、それでは幻想が幻想でなくなる。

もし俺が管理者をやっているのならば、こちらの移転は禁止するだろう。

霊力も魔術も何らかの理由あって幻想と化した、それを今更万人の目に触れさせるのは暴挙に他ならない。それこそ何のための幻想郷だ。

また技術の安易な提供は、幻想郷のアドバンテージの失墜を意味する。せつかく謎技術で鎖国を行っているのに、技術漏洩を許すと簡単に他の勢力からの進行が始まる。

ならばもつとも幻想郷に有効なのは、外の世界に『幻想郷はある』というのを認識のみさせ、幻想郷そのものは保護した状態で外の世界と交渉のみ行う、これに限る。

こうすることにより世界各国からくる霊力・魔力の加工を餌に、常に幻想郷は上位に立て、さらに外の世界の羨望・憧憬を幻想郷の信仰の力として利用し、さらに幻想郷は力をつける。

と、一見多くの利点がありそうにも見えるが、欠点としては幻想郷は多くの憎悪や妬みを買う事だろう。

霊力・魔力など、全く未知であり新たに三次エネルギー資源とも示唆してもいい、稀有な技術の独占をしているのだから、当然といえば当然。

それを全体に公開することなく、小出しにし、出し惜しみをする幻想郷はさぞかし対外的にみて齒がゆいことだろう。

最悪、三次エネルギーに頼らず純科学での成長を望む派と、三次エ

ネルギーに頼り幻想を紡ぐ派と大きく二分する。そうなつては幻想郷といえど混乱の渦に巻き込まれざるおえない。よって幻想郷は敵意の矛先をいかに向けさせない様にするか腐心する。

幻想郷と俺たちの世界、その間に何かワンクッションを起きたいのだ。

ならばそこに、外の世界の住人であるにも関わらず幻想入りした人間がいるとしたら？

さらにそいつが幻想郷と外の世界を繋ぐパイプ役として働いていたら？

もう答えは出ただろう、幻想郷の憎悪をこの俺に向けさせること、これこそが俺の幻想郷での存在意義。

何よりもこれこそが、俺がもつとも警戒していた事態。

しかしそんな俺の危機感を八意さんは笑みを消して瞳を鋭く刺すように向けてきた。

「だけど、その考えは私に対する侮辱だわ」

初めて浮かべる彼女の怒気に思わず気圧された。怯んだ俺の姿に八意さんは続ける。

「今の私は確かに幻想郷の住人である、でもそれ以上に蓬莱山輝夜の従者よ。妖怪の賢者ごとき操り人形なんてもつての他、舐められたものね」

強まる彼女の威圧に俺は成すすべなく狼狽する。

ここが上空1,000m、八意さんの加護の元に成り立っているから、それだけではない。

彼女に呆れられ、見捨てられることが俺は何より恐れている。

だが俺の焦りを生み出したのが彼女なら、それを溶解させたのも彼女だった。

「でも、それでいいのよ。全てあるがままに能動的に受け入れるのは愚者の発想。その点あなたは目先の欲に囚われず、時代のうねりを大きく感じ取り、そして自分が如何に薄氷の上にいるかを認識した」

そう言っただけの威圧はどこへやら、八意さんはいつもの様に子の成長を見守る親のような眼差しで俺を見た。

「安心なさい。言ったでしょう、あなたは私の客人よ。あなたの身の安全はこの『月の頭脳』八意永琳の名にかけて保障するわ」

八意さんの誇りにかけての保障。

それがどれほどの影響力を得るのか分からないが、だが彼女が俺の身の安全を守ってくれることに安堵し、そしてそれ以上に恥じた。

おいおい、結局俺は八意さんを信用しきれてなかったんじゃないのか？

彼女との情報のやり取りもせず、全て自分の推測で物をいつてたんじゃないのか？

幻想郷へ行くと決めた時点で覚悟を決めたんじゃないのか？

「八意さん……すいません、でした。ありがとうございます」

まったく情けない、結局俺の独り相撲、一人で何とかしようとした結果がこれだ。

そろそろ自分の矮小さを理解するべきだな、はあ……

っと、反省なんて後で出来る。

その前に聞いておかなければならぬだろう。

「しかし一体どうやって俺の、身の安全を？」

「八意紫には、槐さいかぢ あなたには今回の騒動に関する一切の干渉を行わないと確約させた。そして幻想入りさせる過程の交換条件で提示したのがこの騒動。もっともあなたへの干渉には期限があるけどね」

「それは……？」

やはりその話は上手くないのだろう。かの管理人は俺を緩衝地帯として使いた……

「10世紀よ」

………?

はい？

えっと、あれ？

聞き間違えたかな？

「え？10年ですか？」

「10世紀よ」

は？なにそれ？

もう何がなんだか桁違いの期限に啞然としている俺の姿をみて、八意さんはクスクスと小さく笑い出した。  
ああ、なるほど。つまりこれは

「・・・冗談ですか？」

そうだろう、10世紀の期限なんて、有限に見える無期限と変わらない。

海外には実刑判決懲役300年とかあるらしい。300年で、もうそれなら終身刑でいいじゃん。

しかしそんな予想全てを裏切り八意さんはもう一度いった。

「いいえ、本当に10世紀よ」

いまから10世紀前、そう1000年前ってなんだったっけ？  
ん~~~~、平安時代？

で、今から1000年後かあ、地球まともに残ってるかなあ

って

「んな阿呆なあ!!」

俺の叫び声が雲と大空の間に響き渡った。

「まあ飛行の術式を展開しただけで、これほどの悶着が起ころうとは思っていなかったけどね。拍子抜けしたわ」

なるほど、驚いてた理由はそれか。

そして今俺は田舎の田舎、雪降り積もるそんな田舎の片隅にある民  
宿で布団に抱かれ震える体を慰めてもらっている。

あの後、俺と八意さん幻想郷を目指し北陸の方へと上がって行き、そして増えてゆくヘリの数に知らぬ顔で突破していこうとする彼女を宥めて、この地に降り立った。

携帯を開けると案の定圏外、一応脱出する前に荷造りしたカバンの中にノーパソも入っているが、当然使えないだろう。

といってもテレビは繋がっているので、完全に情報隔離されているわけではない、が今時ケーブルかよ。

その肝心のテレビも居間にしかなく、腰が悪くと耳の遠いばあちゃんが見る時代劇専用物と成り果てている。

果たして幻想郷はどこにあるか？

以前幻想郷について話を聞いたところによると、日本全国に点在しているという。

ナゾナゾか何かと思った俺を八意さんはイマイチよく分かんない理論で教えてくれた。というのもも術式を絡めた理論展開で、半分以上分からなかったがかるうじで把握したのは

- ・ 幻想郷とは多くの幻想となった場所の集合体である
- ・ 基点を博麗神社におき、他がとりもちの用に繋がった結果である
- ・ 幻想郷の扉は個にあらず、北陸飛んで四国までの幻想と化した場所の境界線上複数に、幻想入りの点がある

と、いうことだ。

しかし今回は八雲紫が扉を用意してくれているというので、境界の綻びを探す手間はなく合流地点に行けばいいとのこと。

一つは南端に位置する天石門別神社あまのいわとわけじんじゃそしてもう一つ北陸の奥地にある神社。

「あめふりのみやみねかたすわじんしゃ  
雨降宮嶺方諏訪神社かあ」

呼びにくい、なんだこれ？つーか聞いたことないんだけど。  
いや、だからこそ幻想と化したの、か？

ああ、くそ調べたい。

回線さえ繋がってればっ！！！！

そこで俺は思いなおした。

あれ？ここの電話回線貸してもらえればよくな？

・・・なんか少々問題かもしれんが仕方ない。

今は緊急事態なのだ！携帯の履歴はともかくメールを見たら呪詛の  
ような文章が数十件入っていた、おそろしあん。

ちなみに先輩からもメールが来てた

「殺人予告が某掲示板に張られてるぞ、しかもくそ伸びてる。注意  
しろ」

ちよつとほっこりした。

さすが先輩、かっこいい・・・あれ？

「殺人予告が某掲示板に張られてるぞ、しかもくそ伸びてる。注意  
しろ」

最後に、爆発しろ」

先輩・・・

もしも自分だけ、自分だけが霊力とか魔力とかいう不思議エネルギーを使い、空を自由に飛ぶことが出来たら。想像したことがあるだろうか？

空を鳥のように飛びまわり、地を歩く人たちに優越感を感じながら笑みを投げかけ、さらに高く、もっと高く。

高層ビルの隙間を縫うように飛び、時には地上めがけ急降下をしかけ、そして雲の絨毯を優雅に散歩する。

ビルの中に居た人々は書類や電話の受話器を思わず落とし呆然と、地上にいた人たちは突然の大型飛行物体に腰を抜かし驚愕を、飛行機を操作するパイロット突如訪れた変事に錯乱する。

それを自身は悪戯が成功した子供のように笑うのだ。

ちよつと学校に行つて来る。ちよつと仕事に行つて来る。

そういつて空へと飛び立つ、皆自分を羨望の眼差しで見送る。

着地場所はもちろん屋上、時間が余って天気がいいならそこでちよつと日向ぼっこなんて憧れるね。

仲間たちは羨ましがらう。いや、見るもの全ての期待を一身に受けるだろう。

皆心の中でそんな非常識を求めている。

日本でライトノベルが廃れない理由、もっと視野を広く持ったらハリポッターなんていい例だろう。

あの本こそ、全世界に話題と反響を呼んだ王道ファンタジーの金字塔。

そう、まさしく世界に広がった。それはつまりこの世の人々が心の中でファンタジーを求めていたに違いない。

そして今まさしく、俺はその不思議ファンタジーの階に手をかけた。しかし

「不自由だなあ、ほんと・・・」

もしそれが本当に起こったとき、想像上の通り能天気には振舞えるのだろうか？

結論はもう出てる。とてもじゃないが振舞えない。

人は羨望する、ここまではいい。

しかし俺一人独占してしまっている、これが問題だ。出る杭は叩かれるとはいうが、まさしくその通り。

突出した存在は羨望、憧れよりも先に、嫉妬や妬みが生まれる。

それを思う数が増えれば増えるほど、感情というのは暴走する。

赤信号、みんなで渡れば怖くない。これは言葉っていうのは実に奥深いと俺は思う。

人は責任の分割を行うことで、多くの支持を得られることで、時にどんな悪行も許されることがある。

もっと簡単に考えようか、もし自身が空を飛ぶのを羨望するだけではないその他大勢なら？

どうだ？答えはすぐでたんじゃないだろうか？

我慢できるか、あんな能天気には空を飛んでいる馬鹿を。

地べたに這いつくばらせて、叶えてやるうじゃないか。

俺たちの夢を。

「うう・・・なんでこんな事態に」

八意さんが飛び立つところ、確かにそれは大いに話題をよんだ。しかしそれ以上に議論が白熱しているのは

『幻想郷へ行く！？槐さいかち 隆治りゅうじの謎を追え！！』

どうしてこうなった？

今一番話題にすべきなのは、背筋が凍るほど美しい八意永琳さんじゃないか！

俺なんて別にどうでもいいよね！！おまけ以下の存在だよね！！  
こんだけ俺に視点を向けるなんて、もう誰かの陰謀だよね！！

確かに八意さんに連れられて大空へ行っただけだよ。

その上同居なんてしてたげだよ。

逆に俺の立場なら、そりゃキレルげだよ。

・・・いや、もうやめよう。

墓穴を自分で掘ってどうするんだ。

「・・・ん？」

その時俺は思わず、パソコンから指を離し一つの記事を凝視する。  
それを何度も読み返し、居てもたっついていられず俺は八意さんを探しに出かけた。

「八意さん、すみません。明日よりたい所あるんですけど」

『東方Project 作者ZUN氏による緊急記者会見 12月2  
4日』

## 9話 おまけ以下の存在（後書き）

次の10話で幻想郷です

とりあえず予定通り

そしてようやく他キャラが出せます

長かった、でもここまで派手に幻想入りして後で辻褄あわせ様としたら、色々外せない点あるんで致し方なし

10話 好きとかそういう次元じゃない(前書き)

なげえー！ー！！！！

ので分割

仕事終わったら次がんばる

## 10話 好きとかそういう次元じゃない

上空1000m、一人の男が黒の防寒着を着用して、この寒空の下カメラを抱いていた。

程よく年齢を重ね、仕事の油がもつとも乗っているであろう男は、くたびれた表情を浮かべながらネオン輝く地上を空しく眺めていた。

（ああ、なんで私はここにいるんだろう）

せすには居られない自問自答を自分自身に投げ、胸ポケットを探りやくたびれたのラッキーストライクを取り出すと、ライターに手を伸ばした。

「へりの中で煙草は厳禁っすよ」

といったのは部下の池田だ。長い髪を後頭部で結び、少しばかりチヤラけた感じの男である。

しかし私はそいつの忠告を無視してライターに火をつけた。

強風に煽られ消えそうになるライターの灯火を必死に守りながら、煙草に火を灯すとその紫煙を一気にフィルター越しに吸い込み肺に溜め込む。

・・・うまい

「あゝあ、もう何言われてもしりませんよ僕は」

「うつせ、そもそもなんでこんな馬鹿みたいなことで、俺が駆り出されなきゃなんねーんだよ」

無粋な部下の発言に胸糞悪くなり、私は大きく備え付けのソファーにもたれ掛かった。

「そもそも、なに？東方、だっけ？ビターしらねえよ、なんだそりゃ。世間様じゃえらく騒ぎ立てているようだが、あんなもん幻想に決まってるだろっ」

再び煙草を啜え、紫煙を吸い込む。  
うーむ、エクセレント。

「はあ、ですがその作品に登場するキャラクターかなんかが、えーっと槐さいかちだったけかな？それ連れて空飛んだ映像が」

「んなもん作りものに決まってるだろ。今の合成技術は何だって出来るんだよ。たとえ生中継っぽく見せる技術なんて、それこそ両手で数え切れるような数じゃねえ」

全く、これだから新人は、映像に映るもの全て信じまいやる。忌々しく煙草を携帯灰皿で捻り潰すと、次の煙草を取り出す。それを池田は方眉をぴくりと動かしたが今度は何も言わなかった。

「そもそもだ。人間がどうやって空を飛ぶ。羽もねえのに。魔力とかなんだか摩訶不思議な技術があるなら何で皆それ使わなかったんだよ。だいたい今俺たちが受けている重力をどうやって相殺するんだよ」

私の全うな疑問に池田は「それは・・・」ともごもご口の中で答えを出そうと必死だったが、結局口を閉じた。

「それみる。つーか魔力で空飛べたんなら、他の生物が何万年の進化をへて空へ羽ばたいた労力はいつたいなんだ。進化論の大前提否定してんじゃねーか。そも、そんなら一匹ぐらい魔力使える動物いてもおかしくないだろ」

「ああもう分かりましたよ！それじゃあなんでこんな事態起きたんですか」

いい加減な夢から醒めたであろう池田の疑問は、今現状置かれている状況へと変わった。

そう私たちの置かれている状況、すなわち

「こんな事態っていうとあれか、この撮影用ヘリコプター使ったの飛行少女探しのことか？」

そう、今私たちは上からの業務命令でヘリを活用した、空中搜索の真っ最中である。

カメラ片手に真冬の寒空へと舞い上がり、狭くて煩いへりの内部で、ありもしない幻想を追いかけなければならぬのだ。

「全く馬鹿馬鹿しい限りだよな。下ではイヴのイベント盛りだくさんだったのに、娘の約束断ってやる仕事がこんな・・・全く馬鹿馬鹿しい」

「今日はその東方 project の製作者の会見あるみたいですからね。ここでちょっとした話題作りでもしておきたいんでしょうね、きつと」

バラバラと不愉快なへりのプロペラの音に眉を顰めながら、私は荒ぶる風を両手で遮り、再び煙草に火をつけた。取り付けの席に深く座り込みながら、私は苛立ちを紛らわすかのようにならぬように紫煙の昇らせる。

隣に座るサポート役の池田は、話が一区切りついたのか黙ってカメラのテープの確認をしている。

結局何が悪いかっていったら、面白半分に騒ぎ立てている私たち報道陣がもつとも悪いだろう。

言いように大衆の羨望に踊らされて、そして数字が取れると分かるや否や、それを煽る私たち報道陣が。

我ながら空しくなってくる。

私の初心は一体なんだったのだろうか？

私は何に憧れてこの業界に入ったんだ？

私の求めていた夢は幻想でしかなかったことに気付いたのは？

だが残念ながら私は、その擦り切れた記憶を再び浮き上がらせることはなかった。

夢を追い求めるには古い過ぎて、達観するにはまだ若過ぎて、中途半端な心を絶妙に釣り合いの取れた天秤のように動かして、私は再び紫煙を胸にためる。

今の私はただ流動的に仕事をこなしているに過ぎないのかもしれない。

天秤は間違いなく、ゆっくりと達観した視野へと傾いているはずだ。だからだろうか？　こんな夢を追い求めるような仕事を毛嫌いしているのは。

とは言え仕事だ、やるだけのことをしよう。

そう思い、大きく紫煙を口から吐き出し、席を立とうとして

私は、まさしく、幻想をこの目で見た。

小型の偵察機か何かと思った。

しかし長年カメラを通して培った目は、自身の認識違いであることを明確に表していた。

飛んでいた。

二人の人影が、一切の飛行機器をつけずに、空を200kmで滑空するへりを追い抜くスピードで。

一人は至って普通の青年だった。グレーのジーパンに赤のジャンパーを着こなし、肩にはカバンを担いでいる。

しかしもう一人は、まるで仮装舞踏会から抜け出したような、奇抜なスタイルだった。

赤と青を縦に割ったドレスを着て、スカートからはその配列が逆になっっている、そう眉唾ものの雑誌によくある時代を先取りし過ぎた服装といえよう。

しかしその相貌は、まさしく、鳥肌が立つほどに美しかった。

「わ、わ、こっちみてますって八意さん」

「ええ、そうね」

幻聴ではないだろう、ないはずだ。

「そんな……馬鹿な」

隣から今にも崩れ落ちてしまいそうなほどに、震えた声を洩らしたのは、間違いなく池田だ。

振り返る必要もない、奴は口をきれいなO字に開けて間抜け面を晒

しているだろう。

体中がまるで金縛りにあったように硬直し、動かすことが出来ないのだろう。

頭は突然の理解不能な現実、完全に機能を停止させているだろう。

何故分かるだつて？ 分かるとも。

何故なら、今私がしていることだからだ。

天秤が大きく揺り動く

カタン、という音が心の中で波紋を広げる

私はその時、新しい夢を描いたのだった

それは私たちを追いつき、追い越し、雲の合間を突き切つて、消えた。

何も出来なかった、プロ失格だ。今思い出しても、そう思う。

「は、ははは。あはははは」

茫然自失、人が理解不能な状況に置かれたとき、最初に行われるのは冬の大気よりも乾いた笑い声だった。

全く滑稽だった。私たちが想像していた事態は、実際の斜め下であったことを嫌でも認識させられた。

だが、私は腐ってもプロ。

たとえ決定的瞬間を捉えることが出来なくとも、やれることは大いにある。

俺は振り返った、新しいおもちゃを与えられた子供のように、そして今しがた描いた夢を実現させるために。

激動は激流を呼び、熱烈になお痛烈に、胸に秘めた衝動を鎮めるために俺は声を張り上げた。

「おい！操縦士！」

「は、はいいい！」

私の言葉にヘリの操縦士も、自失から復活したようだった。当然だ、あれはそうなるべきものだ。

「あいつらが消えてった方角は！？」

「はい！方位角127度・・・あ、これっは！？」

「なんだよ！さっさと見えよ！俺らエスパーでもなんでもねーんだぞ！」

操縦士の戸惑いに隣いた池田が、身を乗り出して問い詰める。  
彼は何度も方位角を確認し、現在地を確認し終えたのちこういった。

「恐らくですが、例の会見の会場へと向かっているかと」

「・・・なに？」

「門松さん、これって」

「・・・本部に連絡しろ。目標を発見したってな」

門松 高次

このくたびれた30過ぎのおっさんは、後幻想郷を追い求める専門カメラマンの第一人者となる。  
が、それはあくまで余談である。

「八意さん！確かに俺はZUNさん記者会見に行きたいとはいいいました。いいましたけど！何もあそこから最短距離で飛ぶ必要ない

じゃないですかあ！！！！」

強風に煽られながら、俺は非常に全うなことを言った気がする。

というか基本的に俺は全うなことしかいってない。9割方八意さんが、常に俺の考える想像斜め45度を羽ばたいている。

そして俺はそれに振り落とされないよう必死だ、そう。今のようにな！

八意さんが伸ばす腕一本が、俺の生死を左右する。

それを俺は両手で握り締め、全身で風を感じる。痛いぐらい。時速で言つと300近くは出てるんじゃないだろうか？

新幹線並みの速度の頼みの綱は、片腕一本だけである、これひどいひどいと言うか、一回落ちている。上空1000？の時点を紐なし、パラシュートなしの自然落下。

無論八意さんがすぐさま助けてくれたが、俺は人生を一度、振り返ることが出来た。実にいい経験をしたと思う、もう二度としない。

というか今はそういう問題じゃない、俺は目立ちたくないんだ。

吉良吉影にまでなったつもりはないが、所謂俺は一般ピープル。

並みのハートしか持たない俺に、これ以上人の注目を集めないで欲しい。

しかしそんな俺の思いを裏切るかのように、八意さんは清々しいくらいにいい笑顔をして答えた。

「槐さいかち、あなた何か勘違いしてるんじゃないかしら？」

「……と、いうこと？」

非常に嫌な予感がする。これは霊力持ち特有の、一種のよく当たる勘みみたいなものだ。

そしてそれが告げている、彼女の次の答えは、俺の望むべきものではないと。

「私はあなたを幻想郷へ連れて行く、その交換条件で提示されたのがこの騒動」

全て言わなくても分かった、もう答えは得た。だがまだ確定はしていない、聞いてはいない。

俺は震える声で死刑宣告の先を促した。

「そ、それは……つ、つ、つ、つまりい」

「ええ、派手に幻想郷入りよ」

その瞬間彼女のスピードは俺の常軌を逸した速度で加速した。降りかかるGと、圧迫する冷たい空気、そんなさなか彼女を繋ぐ腕が唯一の温もりだった。

「ぬわあああ！！！！言うんじゃなかったあああ！！！！」

もつとも今の俺にはそれを堪能する余裕は、小指の甘皮ほどもない。ただただこれから起こるのである。凶事のプレッシャーと、降りかかる重力加速に耐えるので精一杯だった。

「神主さん、今こっちのツテで情報が入ってきました」

その言葉に軽く反応を示したのは、黒を基調としたハンチング帽、やや度の強い眼鏡をかけたスーツ姿の少々やつれた感じの男性だった。

神主と呼ばれる人物は黒のベンチに黙って腰掛け、友人の告げる次の言葉を待ってる。

その友人も急かされたように、次の台詞を言い放った。

「なんと、八意永琳と俺らの敵槐さいかち隆治りゅうじがこの会場に向かってきているらしいです」

その言葉を聞いた神主たる人物は、ベンチから立ち上がり会見する

であろう場所に視線を移す。

手先が震え、足の感覚もやや覚束無い。

それなりの舞台には彼も立ったことがある。だが、これはあまりにも異常だった。

用意された会場は総百人は軽く収容できる規模の会場、所謂大物芸能人の記者会見をするであろう場所。

並みの人間なら、見ただけでその場を覆う重圧に圧倒され、口を開くことすら間々ならない。そして彼は今からその場所で会見しなければならぬのだ。

神主たる人物は諦めにも似た吐息を大きく吐き出し、缶ビールを強く煽ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2043y/>

---

東方槐無夢

2011年12月29日13時47分発行